

文部科学省「地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業
(COREハイスクール・ネットワーク構想)」成果報告書

令和5年度 ぐんまハイスクール・ネットワーク構想 実施報告書 (最終年度)



群馬県教育委員会

令和6年3月

目 次

1.	事業概要	
1.1.	本事業に取り組む課題と目的	2
1.2.	本事業を通して明らかにしたい事項（調査研究テーマ）	3
1.3.	ロードマップ	4
2.	遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組	
2.1.	調査計画	9
2.2.	実施体制	10
2.3.	取組概要	11
2.3.1.	遠隔授業実施表	13
2.4.	取組内容	14
2.5.	考察	20
2.5.1.	目標設定シートに対応した成果と課題	25
3.	コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組	
3.1.	調査計画	27
3.2.	実施体制	27
3.3.	取組概要	28
3.3.1.	地域と協働した取組実績	28
3.4.	取組内容	29
3.5.	考察	31
3.5.1.	目標設定シートに対応した成果と課題	31
4.	まとめ	32
5.	次年度に向けた計画概要	34
	【資料】地域と協働した取り組み実績	35

1. 事業概要

1.1. 本事業に取り組む課題と目的

群馬県教育委員会では、様々な教科における遠隔授業の送受信に関する知見を得ること、及び、コンソーシアムの構築による地域と協働した学校の魅力化を進めること等を目的に、令和3年度からぐんまハイスクール・ネットワーク構想事業を開始した。

初年度である令和3年度は、都市部の中規模校である渋川高校から、中山間地の小規模校である長野原高校及び嬭恋高校に向けた物理基礎の遠隔授業の試行を中心に実施し、機器の使用方法や遠隔授業に適した授業づくり等について検討を進めてきた。また、嬭恋高校では「連携型中高一貫教育」、長野原高校では「ぐんまコミュニティー・ハイスクール」の推進組織をベースとしたコンソーシアムを設置し、地域と協働した取組を推進してきた。

2年目となる令和4年度は、遠隔授業に関して「送受信担当者が連携した授業実施」、「受信体制の在り方」、「校時や年間計画の共通化に関する考え方」、「持続可能な遠隔授業の在り方」の4点を研究テーマとして遠隔授業の本格実施に取り組んだ。また、コンソーシアムに関して、「コンソーシアムの新規立ち上げに必要な取組」、「コンソーシアムの活性化とカリキュラムマネジメント」の2点を研究テーマとし、令和3年に構築した長野原高校、嬭恋高校に加え、尾瀬高校でコンソーシアムを立ち上げ地域協働に取り組んだ。

事業最終年度となる令和5年度は、過去2年間の取組から明らかになった課題の整理や遠隔授業の新たな可能性の模索という観点から、遠隔授業については「受信体制の在り方（継続）」、「情報Iの遠隔授業の展開の可能性」、「配信センター化に関する検討」、「コンパクトなシステム構成による遠隔授業の実施」の4点を、コンソーシアムについては、「母体となる組織のないコンソーシアムの立ち上げ手法」、「地元自治体との協力体制の強化」の2点を調査研究テーマとした。

今年度は、上記の調査研究テーマに基づき、遠隔授業やコンソーシアムに関する取組の検証を進めると共に、遠隔授業の今後の在り方を見据え、教育委員会内で必要な調整についても検討を進め、事業の成果を今後どのような形で本県の高校教育の充実につなげていくことが出来るか明らかにする。1年目、2年目の課題を踏まえ、より意義のある遠隔授業及びコンソーシアム運営の在り方に関する実証研究を進めることを目的に、ぐんまハイスクール・ネットワーク構想事業（3年目）に取り組むこととした。

1.2. 本事業を通して明らかにしたい事項（調査研究テーマ）

（1） 遠隔授業に関する調査研究テーマ

① 受信体制の在り方（継続）

令和3・4年度の遠隔授業は、送信側・受信側の双方に当該教科の免許を保有した教員を配置した状況で実施した。令和5年度に長野原高校から嬭恋高校に向けて実施するホームプランA¹（工業）の遠隔授業は、本県の取組の中で初めて、受信側に当該教科の教員がいない状況下での実施となる。受信側に当該教科の教員がいない状況における遠隔授業を実施し、課題等を整理することで、適切な受信体制の在り方について昨年引き続き検証を行う。

② 情報Ⅰの遠隔授業の展開の可能性

事業開始当初は、情報Ⅰの遠隔授業の実施は想定していなかったが、新教育課程²で情報Ⅰが必修科目となったこと等の影響で、様々な状況に変化が見られた。そのため、情報Ⅰの遠隔授業の実施が、今後の展開へつながること³を見据え、長野原高校から吾妻中央高校に向けた配信を実施することとした。情報Ⅰの遠隔授業に関して、授業づくりや評価の手法、体制づくり等の視点からの検証を行う事で、遠隔授業の新たな可能性について考えていく。

③ 配信センター化に関する検討

群馬県の遠隔授業は、学校間配信方式を基本として取組を進めてきたが、令和4年度の課題の整理や、他の管理機関の取組状況等を伺う中で、持続可能な遠隔授業の実施体制として、配信専用拠点を設けた配信センター方式が有効であることが明らかになってきた。配信センター方式については、大規模な予算確保や新たな組織の立ち上げ等が必要になる可能性も踏まえ、教育委員会内の調整等の在り方を含め、検討を進めていく。

④ コンパクトなシステム構成による遠隔授業の実施

群馬県では遠隔授業の実施に当たり、初年度から専用の遠隔授業システムを用いてきた。専用のシステムには、授業づくりのしやすさや、機器運用に関するアフターサービスの充実などのメリットがある一方、継続的にランニングコストが発生するといった課題も明らかになった。そこで、他県の取組等を参考に、Google ミートやZoom 等、遠隔会議システムを用いた構成について検証を行い、よりコンパクトなシステムによる遠隔授業の実施につ

¹ 学校設定科目。

² 高等学校学習指導要領（平成30年告示）。令和4年度から実施。

³ 情報の免許を保有する教員に限られる等の状況から、遠隔授業の実施により、免許外教科担任制度による指導の解消等が見込めることを想定した。

いての知見を得る。

(2) コンソーシアムに関する調査研究テーマ

① 母体となる組織のないコンソーシアムの立ち上げ手法

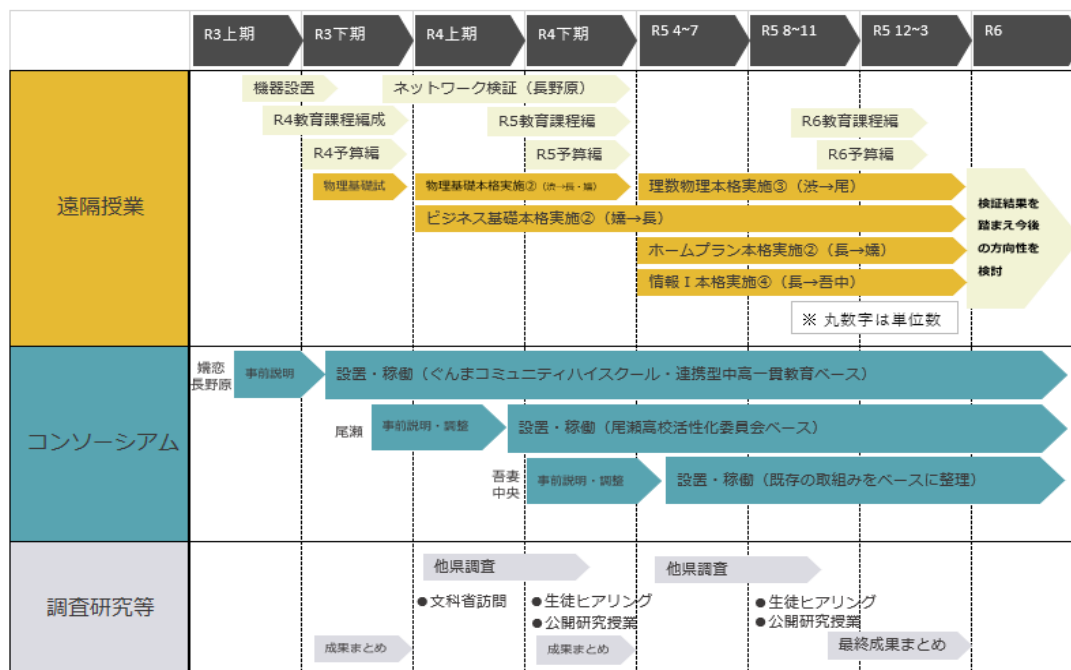
令和3年度は、ぐんまコミュニティー・ハイスクールや連携型中高一貫教育の推進組織をベースに長野原高校及び嬭恋高校のコンソーシアムを構築した。令和4年度は既存の組織をベースとしながら、組織の構成や体裁にとらわれない柔軟なコンソーシアムの在り方について、新たに構築した尾瀬高校のコンソーシアムを元に検証を進めた。令和5年度は、複数学科を設置する吾妻中央高校のコンソーシアムの新規構築を通し、学科を越えた地域協働を進める上で必要な視点を明らかにしていきたい。

② 地元自治体との協力体制の強化

令和3・4年度のコンソーシアムの活動を通し、地域と協働した教育活動が活発に行われている状況がある一方、中学校卒業生数が急減する中で、小規模高校の現状⁴について、地元地域に適切に理解されていない面があることも明らかになった。令和5年度は、ネットワークを構成する小規模校において、地元市町村の代表者等との情報共有を目的とした協議会を開催するなどし、学校の現状に関する理解を深めてもらうと共に、今後の具体的な地域協働の在り方について検討を進めていく。

1.3. ロードマップ

(1) ロードマップ



⁴ 全校生徒数や地元中学校からの進学者数等。

(2) 委託事業の実施期間

令和3年6月30日 ～ 令和6年3月31日

(3) ぐんまハイスクール・ネットワーク構想

- ① COREネットワークの名称：ぐんまハイスクール・ネットワーク構想（GHN）
- ② ネットワーク構成校の概要

i 群馬県立渋川高等学校（群馬県渋川市）

課程	全日制
学科	普通科
生徒数	587人（R5年度）【591人（R4年度）】

小規模校である長野原高校、嬭恋高校の所在地である吾妻地区と同一沿線上（JR吾妻線）にある中規模校。在校生のほとんどが四年制大学への進学を希望しており、若手から中堅・ベテランまで、教科指導に実績のある教員も多いことから、主に配信側の高校として選定した。令和3年度から試行配信を実施し、令和4年度は、長野原高校及び嬭恋高校への物理基礎の配信を実施。令和5年度は、尾瀬高校へ理数物理の配信を行う。

ii 群馬県立長野原高等学校（群馬県吾妻郡長野原町）

課程	全日制
学科	普通科
生徒数	77人（R5年度）【102人（R4年度）】

吾妻地区にある1学年64名定員の小規模校。近年は、定員を充足しない状況が続いており、生徒数が急減している。令和4年度は、渋川高校からの物理基礎及び嬭恋高校からのビジネス基礎の受信を実施。教員数が限られる中だが、特色ある科目（工業科目等）を設定していること等もあり、令和5年度は嬭恋高校へのホームプランAの配信を実施する。また、遠隔授業の新たな可能性を検証するため、吾妻中央高校への情報Iの配信も行う。令和5年度は配信校の中で最も多い週6時間の配信を実施するため、遠隔授業配信の重点校として位置づけた。

iii 群馬県立嬭恋高等学校（群馬県吾妻郡嬭恋村）

課程	全日制
学科	普通科
生徒数	47人（R5年度）【69人（R4年度）】

吾妻地区にある1学年64名定員の小規模校。近年は、定員を充足しておらず、他地区の小規模校と比べても入学者が少ない状況にある。地域の特性を生かしたスケート・スキー競技における全国募集の実施の他、地域・教育魅力化プラットフォームの伴走支援を受け、プログラム開発やコーディネーターの配置検討等を行っている。令和4年度は渋川高校からの物理基礎の受信、及び長野原高校へのビジネス基礎の配信を実施。令和5年度は、長野原高校へのビジネス基礎の配信の継続及び長野原高校からのホームプランAの受信を実施する。

iv 群馬県立尾瀬高等学校（群馬県沼田市）

課程	全日制
学科	普通科・自然環境科
生徒数	124人（R5年度）【133人（R4年度）】

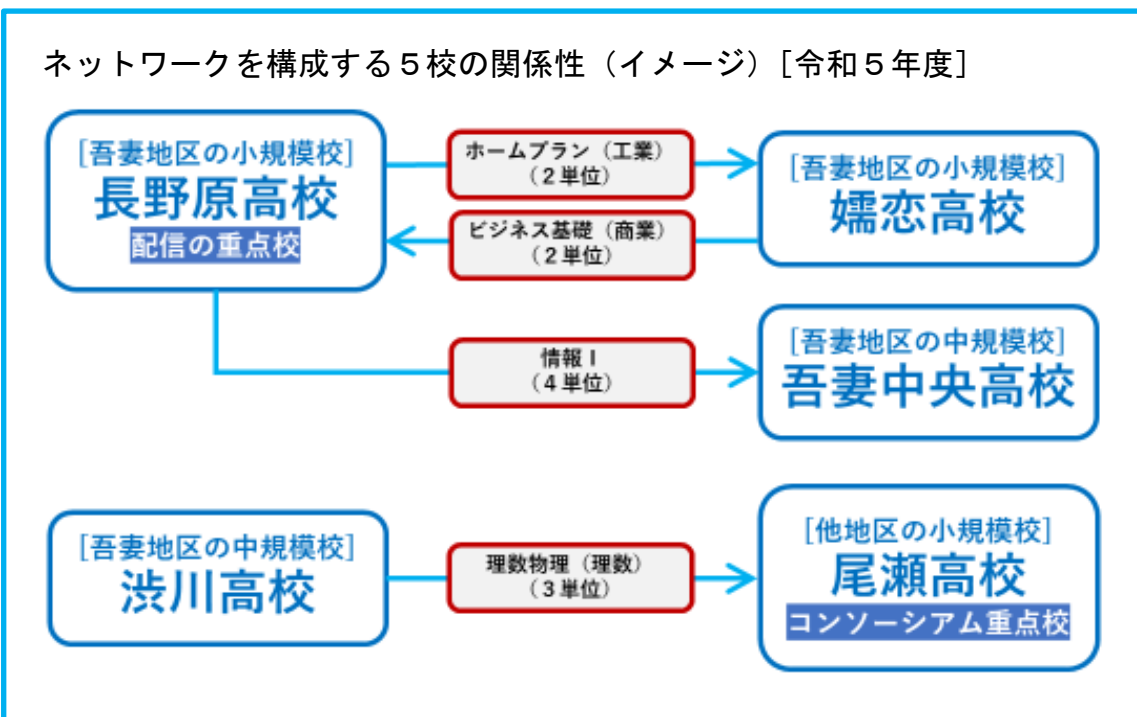
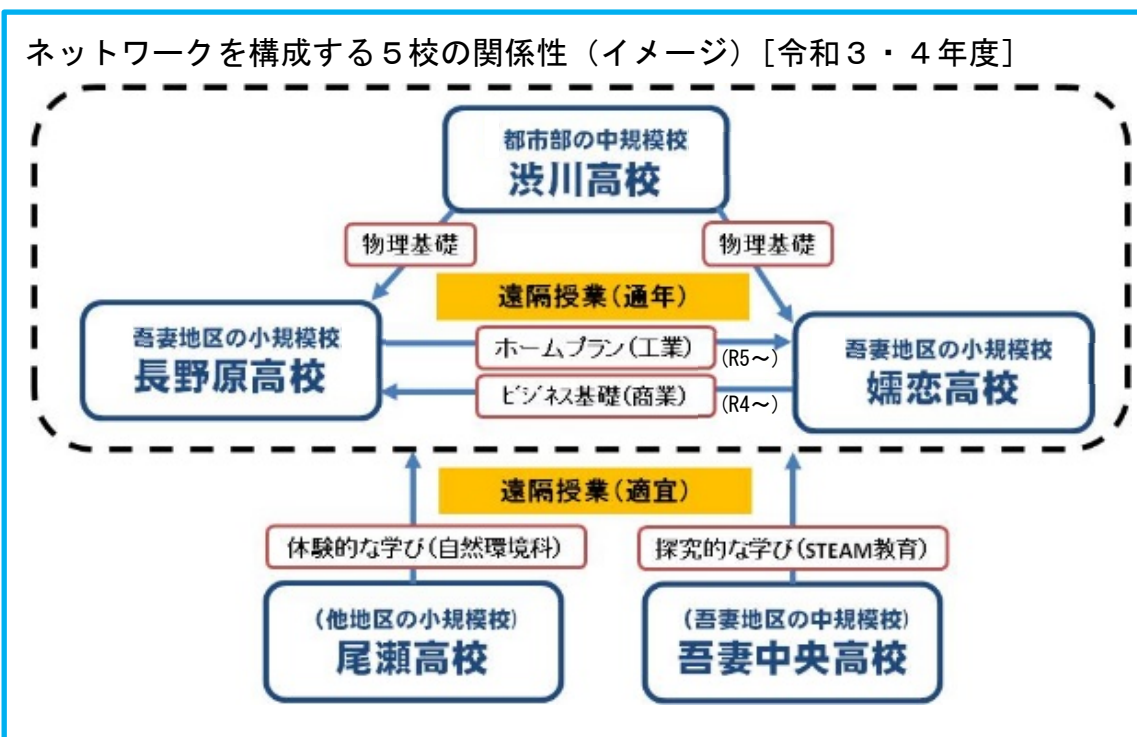
吾妻地区とはやや距離がある沼田・利根地区にある1学年64名定員の小規模校。吾妻地区の2校の小規模校と比べると現状における入学者がやや多い。普通科に加え自然環境科を設置し、全国から生徒の受入れを行っている。特に自然環境科では、地域と協働した教育活動を教育課程内外で積極的に展開しており、探究的な学びに関する取組も充実していることから、令和5年度はコンソーシアムの重点校として位置づけた。令和5年度は渋川高校からの理数物理の受信を行う。

v 群馬県立吾妻中央高等学校（群馬県吾妻郡中之条町）

課程	全日制
学科	普通科・生物生産科・環境工学科・福祉科
生徒数	473人（R5年度）【484人（R4年度）】

吾妻地区の中核校として、平成30年4月に、地区の2校の統合により開校した中規模校で、普通科・農業系2学科・福祉科の計4学科からなる。特に農業系学科における地域協働の取組が充実しており、これまでの取組を他学科にどのように展開していくことができるかについて、コンソーシアムの構築と合わせて検証していく。令和5年度は長野原高校からの情報Ⅰの受信を行う。

③ ネットワーク構成校の関係性



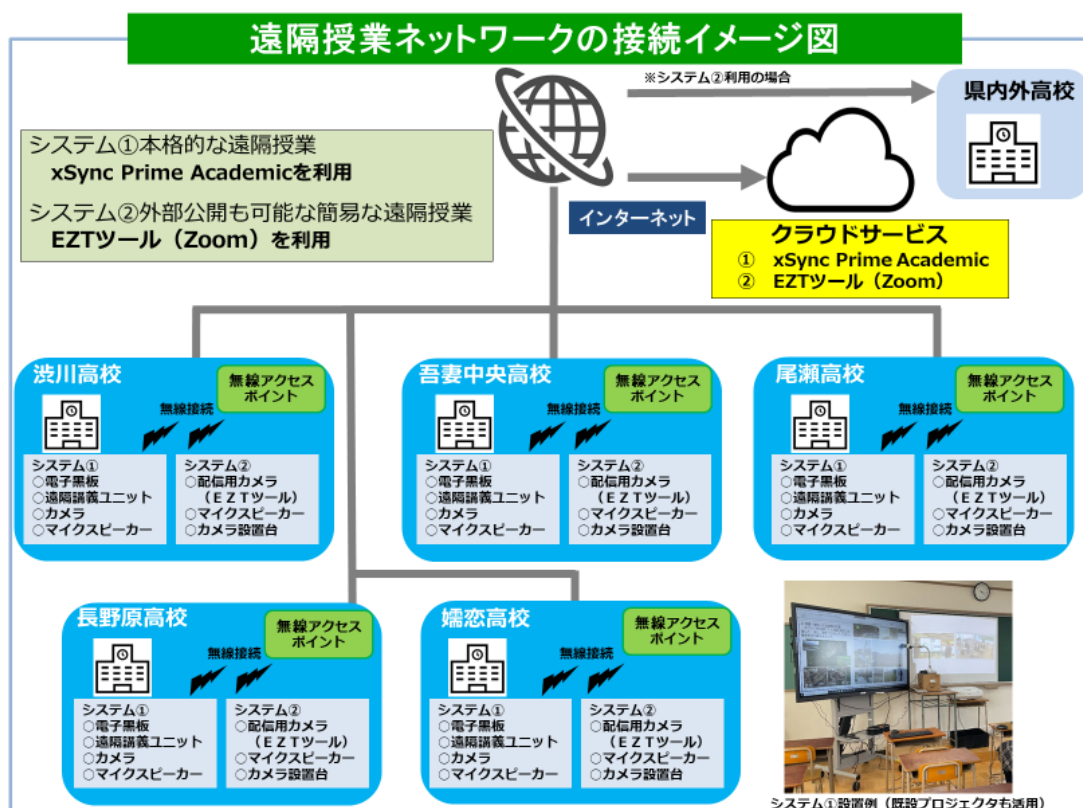
④ 各校に設置済みの遠隔授業システム

システム i ELMO バイシンク プライム アカデミック (xSync Prime Academic)

No.	名称	型番	メーカー	導入年度
1	75型電子黒板 (昇降スタンド付き)	CBS-ELM75F7CL	ELMO	R 3
2	遠隔講義ユニット	SO64	ELMO	
3	遠隔授業用カメラ	L-12F	ELMO	
4	マイクスピーカー	YVC-1000	YAMAHA	

システム ii EZT ツール (Zoom)

No.	名称	型番	メーカー	導入年度
1	配信用書画カメラ	MA-1 ⁵	ELMO	R 3
2	配信用マイクスピーカー	YVC-1000	YAMAHA	
3	カメラ設置台	PR-16	サンワサプライ	



⁵ 当初導入した L-12W-EZT に不具合が生じたため、令和4年度末に機器交換。

2. 遠隔授業の実施や運営体制に関する取組

2.1. 調査計画

(1) ホームプランAの送受信担当者へのヒアリング内容等の分析（受信体制の在り方）

令和5年度に実施するホームプランA（工業）の遠隔授業は、受信側に当該教科の免許を保有する教員を置かない状況で実施する。受信側に当該科目の教員がない体制での適切な授業実施の手法について、主に送受信担当者へのヒアリング内容の分析を通して明らかにしていく。

(2) 情報Iの遠隔授業に関する課題の収集及び整理（情報Iの遠隔授業の展開の可能性）

新教育課程の実施に伴い、情報Iの遠隔授業の実施のニーズが高まることが想定される。一方、情報Iは必修科目であり、選択科目と比べ受講生徒数が多くなる傾向があるため、今後の展開を考えて行く上での課題を整理する必要がある。情報Iの遠隔授業を実施する上での課題について、送受信担当者へのヒアリングや、受信側教室の観察等を通して明らかにしていく。

(3) 実施体制に関する管理機関内の調整実施（配信センター化に関する検討）

これまで遠隔授業の本格実施に取り組んできた中で、学校間配信の手法に対し想定を超える課題が明らかになり、遠隔授業の発展性や持続可能性を考える上では、配信センター等の設置がその方向性の1つとなってきた。学校間配信と比較し、配信センターの設置には部署横断的な取組が必要であり、管理機関においてどのような調整が必要であるかについて検証を進める。

(4) Google ミートを用いた遠隔授業の実施検証（コンパクトなシステム構成による遠隔授業の実施）

群馬県で採用した専用の遠隔授業システムについて、これまでの取組から、授業づくりのしやすさや、メーカーからの手厚いアフターフォロー等、使用上のメリットが明らかになった。一方、ランニングコストの継続的な確保が課題として浮き彫りになったため、Google ミート等を用い、よりコンパクトなシステムによる費用を抑えた遠隔授業の実施手法について検証していく。

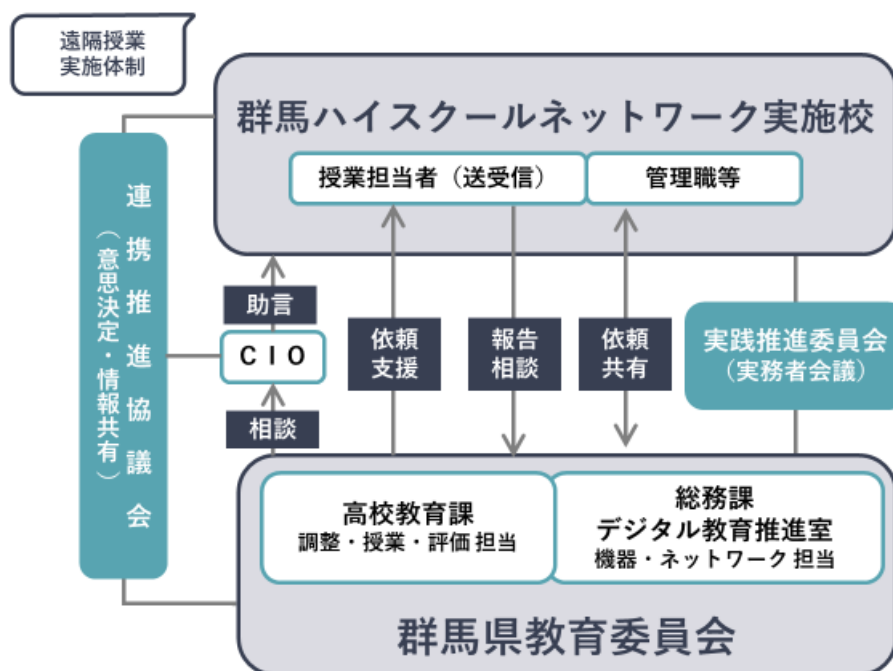
2.2. 実施体制

管理機関が中心となり、各コンソーシアムの代表、学校関係者の代表、県教委事務局職員からなる「ぐんまハイスクール・ネットワーク連携推進協議会」を設置し、CIOの指導・助言を受けながら、事業計画の決定や運営管理、事業の評価・検証などを行う。

連携推進協議会の下には、各学校の管理職や実践推進主任、県教委事務局職員からなる「ぐんまハイスクール・ネットワーク実践推進委員会」を設置し、事業計画や具体的な事業に関する検討や協議などを行う。

実践推進委員会の下には、各学校に実践推進組織を設け、事業の実施が、管理職を中心に、学校組織全体で行われるよう努める。特に各学校の実施体制については、特定の教員のみが関わるのではなく、校長のリーダーシップの下、教科や学年、分掌等で情報共有を行うとともに、人事異動等によって担当教員が変わった場合等においても、取組が円滑に継続するよう、組織的な体制を整備することに留意する。

事業の管理については、構築した実施体制により、年間計画に基づいて行う。各取組が「目的・目標」を踏まえたものになっているか、事業に関わる全ての人が当事者意識を持って取り組んでいるかといった視点から、管理機関が中心となって、事業全体の管理を行う。



2.3. 取組概要

月	実施内容
R 5年4月	1日 業務委託契約締結 併任辞令発令 3日 非常勤講師雇用に係る予算配布（渋川高校） 4日 渋川高校管理職への事業説明 5日 旅費・消耗品予算配布（ネットワーク校） 6日 実践推進委員会 長野原高校・嬭恋高校管理職への事業説明 7日 実践推進委員会 遠隔授業システム利用契約 12日 嬭恋高校・吾妻中央高校管理職への事業説明 17日 令和5年度実施計画書提出（各校より） 18日 情報Ⅰの配信に関する協議 19日 事業打合せ会議（CIO） 25日 嬭恋高校コンソーシアム会議 28日 第1回実証地域連絡会議（オンライン）
5月	18日 実践推進委員会 26日 実践推進委員会
6月	7日 実践推進委員会 20日 長野原高校コンソーシアム会議 21日 事業打合せ会議（CIO） 23日 尾瀬高校コンソーシアム（シラネアオイ植林活動同行） 26日 第1回連携推進協議会
7月	7日 吾妻中央高校コンソーシアム （中之条ビエンナーレ準備同行）
8月	3日 第2回実証地域連絡会議（対面） 9日 遠隔授業の方向性に関する協議 18日 Google ミートを用いた遠隔授業実施検証 25日 バイシンク・クラスルーム使用検証
9月	2日 遠隔授業の方向性に関する協議 21日 県外視察 ～22日

	<p>28日 公開授業（ホームプランA）</p> <p>29日 公開授業（理数物理）</p> <p>県外視察受入</p>
10月	<p>3日 吾妻中央高校コンソーシアム打合せ会議</p>
11月	<p>6日 嬭恋高校コンソーシアム （地域協働に関する成果報告会参加）</p> <p>7日 長野原高校コンソーシアム （活動報告会参加）</p> <p>8日 尾瀬高校コンソーシアムヒアリング調査</p> <p>13日 実践推進委員会 県外視察受入 公開授業（理数物理）</p> <p>14日 県外視察</p> <p>15日 訪問調査（運営指導委員・内田洋行）</p> <p>21日 事業打合せ会議（CIO）</p> <p>22日 配布予算執行状況調査（ネットワーク校）</p> <p>24日 第3回実証地域連絡会議</p> <p>27日 実践推進委員会</p>
12月	<p>8日 探究的な取組に関する学校間連携（尾瀬・吾妻中央高校）</p> <p>13日 授業担当者ヒアリング調査（長野原・嬭恋高校）</p>
R6年1月	<p>23日 長野原高校コンソーシアム会議</p> <p>24日 事業打合せ会議（CIO） 嬭恋高校機器検証</p> <p>29日 最終成果報告会（群馬県）</p> <p>30日 最終成果報告会（全国）</p> <p>31日 実践推進委員会</p>
2月	<p>14日 嬭恋高校機器検証</p>
3月	<p>8日 情報I プログラミング授業検証①</p> <p>13日 情報I プログラミング授業検証②</p> <p>15日 情報I プログラミング授業検証③</p> <p>23日 尾瀬高校学習成果発表会</p>

2.3.1. 遠隔授業実施表

配信拠点	受信校	教科名	科目	開設学年	配信校生徒の有無	遠隔授業実施理由	試行・本格実施の別 (R3・R4・R5)	受信側の配置体制	遠隔授業実施回数 / 全授業回数
渋川高校	尾瀬高校	理数	理数物理	3年選択	無	専門性	R3：なし R4：なし R5：本格実施	理科 教員	49/81
長野原高校	吾妻中央高校	情報	情報Ⅰ	2年必修 2クラス	無	免許外 専門性	R3：なし R4：なし R5：本格実施	情報 教員	A組 53/56 B組 54/57
長野原高校	嬭恋高校	工業	ホーム プランA	3年選択	無	多様な 教科	R3：なし R4：なし R5：本格実施	地歴科 教員	57/59
嬭恋高校	長野原高校	商業	ビジネス 基礎	2年選択	有	専門性	R3：試行 R4：本格実施 R5：本格実施	商業科 教員	24/55

2.4. 取組内容

(1) ホームプランAの送受信担当者へのヒアリング内容等の分析（受信体制の在り方）

群馬県では、令和3年度の試行開始以来、物理基礎（理科）、ビジネス基礎（商業）、理数物理（理数）、情報I（情報）、ホームプランA（工業）の遠隔授業に取り組んできたが、ホームプランAを除く、全ての遠隔授業において、受信側教室にも当該教科の免許を保有する教員を配置する形をとってきた。令和4年度の検証においては、当該教科の教員を受信側教室に配置することで、「生徒の学びの充実につながる」という成果が得られた一方、「受信側に当該教科の教員が配置できない状況こそ、遠隔授業のニーズがある」という声も聞かれた⁶。ホームプランAは、元々工業系の科目が設置されていない嬭恋高校において、新たな選択科目を追加して実施するものである。そのため、受信校の工業教員の配置や、指導に必要な一般的な設備や教材等の準備もない中、送受信担当者が協力・工夫しながら授業づくりを行うこととなった。

ホームプランAの遠隔授業は、配信側が工業科教諭1名、実習教員1名の計2名、受信側が地歴科教諭1名の合計3名の体制で実施した。以下は、それぞれの担当者に対しヒアリングを行った内容をまとめたものである。

<配信担当教諭（工業科）>

- ・ 授業開始当初は、実技の時間も多し授業を遠隔で指導できるか非常に大きな不安があった。
- ・ 令和4年度の他の遠隔授業で、Google クラクルーム（以下、クラクルーム）を用いた送受信の連携がうまく機能している様子を見ており、クラクルームを積極的に使用して受信側の先生とのコミュニケーションをとるようにした。
- ・ クラクルームを用いた情報共有や教材の提示、受信側の準備の依頼等は（年間約60回の授業に対し）115回実施した。
- ・ 受信側の先生が工業科目の知識を持ち合わせていないことを念頭に、教材の準備等は極力具体的に、また、前もって行うように心がけた。
- ・ 今後継続的に授業の配信を行う際は、教材の購入に必要な費用負担を前年度のうちに受信校側の徴収金等に計上することが必要である。
- ・ 実施が義務づけられている対面授業については、不要であると感じる。受信側の8名の生徒とのコミュニケーションは、オンラインのみで特に問題を感じなかった。（長野原高校と嬭恋高校は車で15分程度の距離であり近いが）対面授業を実施するためには、自校で担当する授業の時間割を変更する必要がある。
- ・ ホームプランAの遠隔授業を円滑に実施できたのは、選択した8名の生徒の授業への取組姿勢が積極的であった点が大きい。対面授業が不要と思えるのも、生徒の姿勢

⁶ 令和4年度実施報告書 27～28 ページ。

によるところが大きい。

<配信担当実習教員>

- ・ ホームプランAは授業に必要な用具が多くあり、遠隔授業機器のセッティング等もあるため主担当1名で実施するのは相当負担が大きいと感じる。
- ・ 作業中の生徒の手元を確認するために、クロームブックのカメラ機能を用いた。一方、クロームブック本体を持ち上げた状態で生徒の手元を撮影するには、本体の重量等の面から不具合もあり、スマートフォンのカメラ機能が使える環境があると良い。
- ・ 主担当の教諭を中心に、3人の担当者が連携して授業を進められたこと、生徒が積極的な姿勢で授業に臨んでくれたことが、結果的に円滑な授業実施につながった。

<受信担当教諭（地歴科）>

- ・ 受信側として、授業の準備に必要な時間や作業は相当量であったが、配信担当の教諭からクラスルームを用いた的確な指示があったため、教科の専門性については不要であった。
- ・ 当初から生徒が積極的に授業に臨んでくれたこともあり、成績等も概ね良好な結果となり、指導や評価もスムーズに行う事ができた。
- ・ （本来は、「政治・経済」と「ホームプランA」のどちらかを選択するところを、8名全員が「ホームプランA」を選択したため）自身が担当する予定であった「政治・経済」は開講されなくなり、結果として持ち時間数が減少した。仮に想定通りの持ち時間数であった場合は、受信担当としての業務をかなり負担に感じた可能性もある。

（2） 情報Ⅰの遠隔授業に関する課題の収集及び整理（情報Ⅰの遠隔授業の展開の可能性）

コア事業による遠隔授業の当初の目的の1つとして、「中山間地域の小規模校の生徒の大学進学ニーズに応じた科目配信」があったが、令和4年度の検証を通し、そうしたニーズが限定的であることが明らかになった⁷。そのため、免許保有者が少ない情報（情報Ⅰ）の遠隔授業を新たに実施することで、遠隔授業の展開の可能性を広げることとした。

情報Ⅰの遠隔授業が、これまで取り組んだ遠隔授業と大きく異なる点は、主に次の2点である。1点目は、これまで取り組んできた遠隔授業の受信生徒数が最大で10名未満であったところが、必修科目である情報Ⅰは30名以上となること、2点目は、プログラミングの分野の学習において、生徒が自身のパソコンで行う作業内容を配信側で把握する必要があることである。

1点目の受信生徒数が増えることについて、主に講義型の授業を行う分野については受信生徒数が増えても特段の問題は生じなかった。この点については、受講生徒を対象としたアンケートの「授業が分かりやすいか」の質問に対し、95%の生徒が当てはまる（「当て

⁷ 令和4年度実施報告書 30～32 ページ。

はまる」+「どちらかといえば当てはまる」の合計)と回答していることや、自由記述において「黒板と比較してスライドの方が見えやすい」、「黒板のように消えないので確認しやすい」、「授業が終わった後でメールで先生に質問できる」など肯定的な記述が多数見られたことから明らかであった。

一方、群馬県のシステムで使っているカメラでは、受講生徒全員が画角内に収まらず、授業者が教室全体の様子を把握しにくいことや、マイクスピーカーから離れた席の生徒が発言する声が、授業者に聞こえにくいことなどの課題も生じた。しかし、受講生徒の人数が多いことによる見取りの難しさについては、これまでも議論されているところであり、他県等の事例も参考に、スプレッドシートやジャムボード等のアプリを活用するなどの方法で、生徒の学習の様子の把握に努める等してきた。

授業そのものは、アプリの活用や、送受信担当者が協力して指導に当たることなどの工夫により進めることができたが、受講人数の多さが最も影響を与えたのは、評価に関する部分であった。これまでの少人数での遠隔授業では、受信生徒の授業中の取組状況等を、配信担当がリアルタイムに一定程度把握できたため、授業への取組状況が芳しくない生徒に対しても、早めに声かけする等の指導を行う事ができた。一方、情報Ⅰの受講生徒は2クラス合計で60名以上おり、カメラやマイクスピーカーを通して授業中に生徒全体の様子を把握することが難しく、生徒の取組状況は、授業後の一定の期間において提出されるワークシート等によって授業担当者に届くことになる。こうした状況下において、生徒把握までの時間差が繰り返し生じることにより、適切なタイミングで指導を行えば、早期に取組の改善の可能性のあった生徒に対する指導が不十分となってしまう事例が発生した。

2点目の、プログラミングの分野の学習において、生徒が自身のパソコンで行う作業内容を配信側で把握する必要がある点については、新たなアプリの導入を検討することで解決を試みた。

群馬県が導入する遠隔授業システムであるバイシンク・プライムと同一のメーカーが提供する授業支援アプリである、バイシンク・クラスルームを用いることで、新たなサーバー等を必要とせず、生徒のパソコンの画面を授業担当者が共有することを想定した。

しかし、授業での使用を想定して実施した検証では、各校に整備されるネットワーク環境において、セキュリティに関する技術的な問題からアプリがうまく作動しないことが明らかとなった。群馬県における県立高校の生徒用のネットワークは、一人一台PCの導入に合わせて整備されたもので、コア事業で導入した遠隔授業に関する機器を接続することを想定していなかったものとなる。こうした状況から、今回のアプリ導入以外の場面でも、技術的な問題により機器の運用等に支障をきたす場面が少なからず生じた。授業支援アプリの導入についても、技術的な検証を尽くしたが根本的な解決方法を見いだす事ができず、使用を断念せざるを得ない状況となった。

(3) 実施体制に関する管理機関内の調整実施（配信センター化に関する検討）

令和4年度の報告においては、「持続可能な遠隔授業の在り方」について、中・大規模校からの配信を軸とした学校間配信方式は課題が多く、予算や人員配置に関する面も含め、配信拠点（配信センター）からの配信についての検討が必要と考察した。

令和5年度においては、配信拠点からの遠隔授業実施に関して、教員配置を担当する部署と現状を共有し、可能性を検討することとした。

① 共有・検討の内容

○課題

- ・ 中山間地の小規模校における、大学入試に対応した授業の受信ニーズは限定的である。
- ・ 学校間配信は時間割等の調整に多くの労力が必要で、特に都市部の中・大規模校からの配信においては配信校に大きな負担がかかる。
- ・ 受信教室への教員配置が必須で、一度に受信できる生徒の上限が40人のルール下では、継続的な予算確保に関する理解を得るのが難しい。

○現状

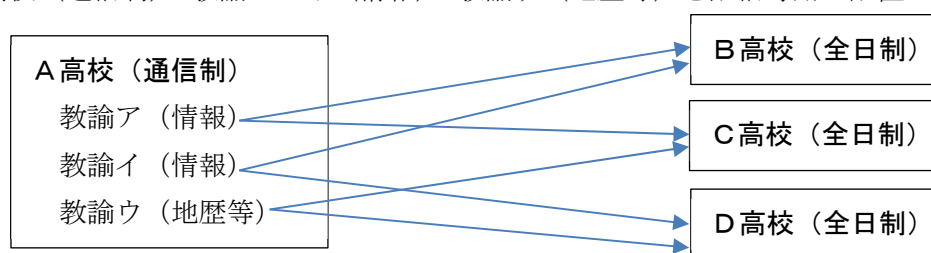
- ・ 群馬県においては、「中山間地の高校の学びの充実のために遠隔授業を実施する」、「都市部の大・中規模高のリソースを小規模校の活性化につなげる」といった、当初コア事業で想定した仮説が必ずしも成立しない状況がある。
- ・ 現行のルール下では、遠隔授業のコスト面における優位性を見いだすことは難しく、他の視点から対外的に明らかなメリットを説明する必要がある。

○検討

- ・ 課題と現状を踏まえ、免許保有者が限られる「情報Ⅰ」の授業の配信を行う事を軸に、展開案1及び2のような形で配信拠点方式の遠隔授業を実施することを想定した検討を行う。

■展開案1 通信制高校に配信専用の教員を複数配置し情報Ⅰ等の遠隔授業を配信

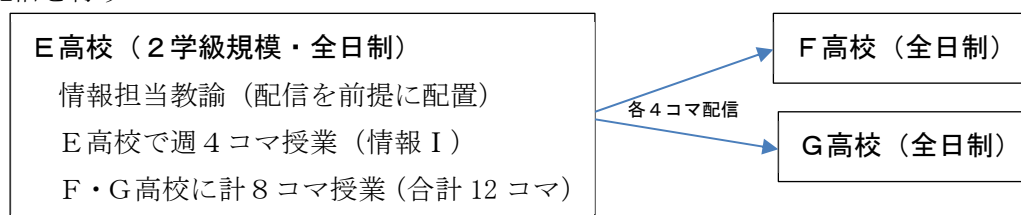
【例】A高校（通信制）：教諭ア・イ（情報）・教諭ウ（地歴等）を配信専用配置



■展開案2 小規模校に配信を前提とした人事配置を行い、情報の遠隔授業を実施

【例】E高校（2学級規模）：配信を前提とした情報の教員を配置

- ・ E高校の授業を4単位担当し、F高校とG高校に4単位ずつ（合計8単位）の遠隔授業の配信を行う



② 検討結果

＜展開案１＞ 通信制高校に配信専用の教員を複数配置し情報Ⅰ等の遠隔授業を配信

メリット

- ・ 情報Ⅰを配信拠点から遠隔授業で実施することにより、非常勤講師が授業を行ったり、情報の免許は保有しているが専門教科は異なる教員が指導したりする状況を解消できる可能性がある。
- ・ 通信制高校を配信専用拠点とすることで、校時や学校行事等の影響を受けずに授業を配信することができる。

課題

- ・ 受信教室に免許保有者が常駐する必要があるため、1つの授業を2人の教諭で行う事になり、県全体の人員配置の観点からはメリットを見いだしにくい。
- ・ 県内に4校の通信制高校があるが、いずれも全日制高校もしくは定時制高校との併置校であるため、現状においても使用できる施設が手狭な状況であり、配信環境を整備することが難しい。

＜展開案２＞ 小規模校に配信を前提とした人員配置を行い、情報の遠隔授業を実施

メリット

- ・ 小規模校に情報の正規教員を配置出来る可能性がある。

課題

- ・ 仮に配信授業を中心に担当する教員を配置できても、短縮授業や学校行事等の調整が必要であり、学校間配信で生じる課題を解消できる手法とは言えない。

(4) Google ミートを用いた遠隔授業の実施検証（コンパクトなシステム構成による遠隔授業の実施）

令和4年度の報告では、授業配信に必要な費用について整理し、遠隔授業システムの運用に必要な費用として、1校当たり年間約20万円の予算が必要なことを明らかにした⁸。機器の使用料は遠隔授業の実施校数に応じて増加するため、持続可能な遠隔授業の在り方を考える際には、ランニングコストを抑える方法についても検証が必要となる。他の管理機関においては、専用システムを用いず遠隔授業の実施環境を整えている事例もあることから、群馬県においても県立高校の生徒・教員が既に日常的に使用しているGoogle ミートを使い、遠隔授業の実施環境を整えることができないか検証を行った。

⁸ 令和4年度実施報告書 22 ページ。

① 検証内容

日 時 令和5年8月18日（金）

場 所 配信：渋川高校、受信：尾瀬高校

目 的 現在使用している xSync（バイシンク）プライムアカデミックの代替として、Google ミートを用いた遠隔授業の実施について、具体的な授業を想定した検証を実施した。

検 証

【準備】

- ・ Google ミート①、②（2回線を準備）
- ・ 電子黒板・マイクスピーカー（送受信側にそれぞれ1台）
- ・ 液晶モニター（送受信側にそれぞれ1台）

【概要】

<配信側>

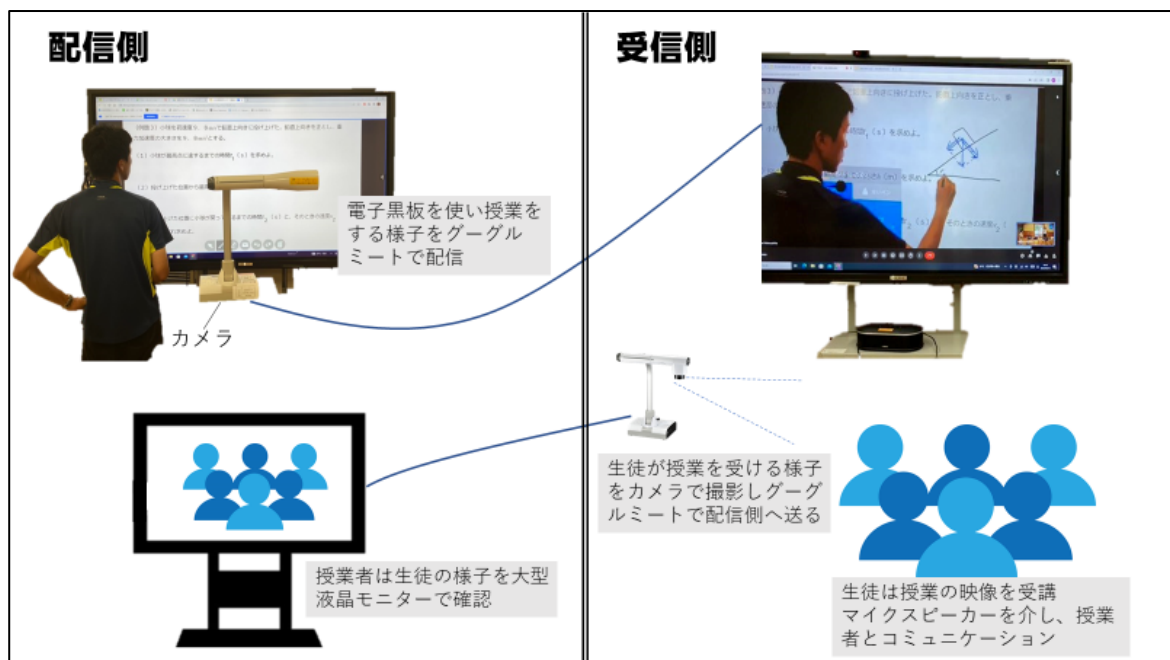
- ・ 授業配信者は、電子黒板を用いて授業を行う
- ・ 授業をカメラで撮影し、Google ミート①を介して、受信側教室に配信
- ・ 生徒の様子は Google ミート②を介して、配信側教室の液晶モニターに投影

<受信側>

- ・ 生徒は Google ミート①を介して電子黒板に映した映像を見ながら受講
- ・ 生徒の様子をカメラで撮影し、Google ミート②を介して配信側に送る
- ・ 授業者の様子は Google ミート①を介して、受信側教室の液晶モニターに投影

<バイシンクと Google ミートの違い>

- ・ バイシンクで送受信双方の電子黒板への手書きによる書き込みが相互に共有されるが、Google ミートでは画面共有が行えない。

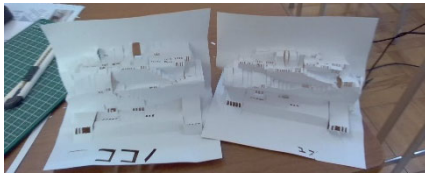


②結果

- ・ バイシンクによる画面共有と比較し、Google ミートを介した授業の映像はやや不鮮明であり、映像を見て授業を受ける生徒がストレスを感じる可能性がある。
- ・ Google ミートを使った場合は、手書き内容の共有ができないため、スライド上に必要な内容を入れ込んでおく必要がある。物理や数学等の数式や図を多用する科目では、教材作成の労力が大きい。
- ・ 画面共有が行えるシステムとして Google が提供しているジャムボードの使用についても同時に検証したが、配信側の書き込み内容が受信側の画面に反映されるまでに数秒のタイムラグがあり、手書きの板書を前提とした授業には適さないことが分かった。
- ・ Google ミートを使用した遠隔授業を行っている他県では、画面共有ができない点を補うため、教師と生徒が一人一台ずつ使用する iPad に画面共有用のアプリを入れている。(iPad は専用のペンを使用することで、手書きの感覚に近い入力が可能だが、群馬県の導入するクロームブックはディスク型のタッチペンにしか対応していない上、ペン先以外に手の一部等が画面に接触すると書き込めなくなるため、鉛筆でノートに書き込むような感覚で使用するには不向きである。)

2.5. 考察

(1)「受信体制の在り方」について



ホームプランAの授業の様子

遠隔で生徒が製作した作品（写真上）

学習内容を生かしイグルーを製作（写真右）



令和4年度までに取り組んだ、物理基礎（理科）、ビジネス基礎（商業）、理数物理（理数）、情報Ⅰ（情報）の遠隔授業は、受信側教室にも当該教科の免許を保有した教員を配置して実施してきた。令和5年度に実施したホームプランA（工業）の遠隔授業は、共に小規模校である、長野原高校から嬭恋高校に向けて配信し、受信側の嬭恋高校には工業の教員の配置がない状況での実施とした。

ホームプランAは主に、建築の基礎について学ぶ学校設定科目で、実習を伴う授業内容であることから、当初は遠隔での授業実施に対する授業者の不安も大きかったが、結果的に送信側（教諭・実習教員）と受信側（地歴科教諭）の連携により、年間を通じて授業を円滑に

行う事ができた。

それぞれの担当者へのヒアリング内容等から、受信側に当該教科の教員が配置されない状況で遠隔授業を行う上でのポイントは次の2点に整理できる。

1点目は、クラスルームを用いた情報共有である。遠隔授業は、年間計画に基づき、十分な準備の元に行われることが理想ではあるが、現実的には連絡が授業の直前になったり、急な予定変更に対応する必要がある場合もある。そういった状況においても、送受信それぞれの担当者が、クラスルームを確認すれば対応できるという共通の認識を持つことが、授業をスムーズに進めるために重要である。群馬県の場合はクラスルームを基軸に連絡体制を構築したが、連絡方法そのものが重要なわけではなく、リアルタイムのコミュニケーションが確実にとれる方法を送受信担当それぞれが確認しておくことが、円滑な授業実施のために必要不可欠と言える。

2点目は、遠隔授業に適した授業づくりを行う事である。ホームプランAでは、「①スライドを用いた説明→②生徒による作業→③作業の内容の提出→④振り返り」のサイクルを基本とした授業展開がなされていた。①の説明を丁寧に行う事、②の作業に必要な器具等の準備を具体的に依頼しておくことの2点は、授業の円滑な進行にとって特に重要な部分であった。また、③の作業内容の提出も、「完成したワークシート」、「作品の写真を複数添付」など複数の方法を組合せることで、配信側の教員が生徒の取組状況を適切に把握することが可能になった。

このように、「送受信担当の適切な情報共有」と「遠隔授業に適した授業づくり」の2点を実現することができれば、実技や実習を伴う科目であっても、遠隔授業で行う事は可能であることが明らかになった。更に、担当者からの意見にもあったように、生徒の手元の様子を映すために、スマートフォンのカメラ機能を活用したり、生徒のPCの画面を受信側で確認できるアプリを導入したりすることで、授業の実施環境を一層充実させることも可能であると考えられる。

一方で、送受信に必要な機器の設置・片付けに時間がかかること、対面授業の実施が勤務校で行っている授業に影響を与えてしまうこと、1つの授業を行うために複数名の教員が関わる必要があることなど、これまでの検証で明らかになった課題自体はホームプランAの授業においても継続して発生している。様々な状況における遠隔授業の検証を進めた事で、遠隔による授業の質をソフト面で高めていくことと、予算や設備、人員配置についての調整を進めていくことは、それぞれ取り組む必要がある課題であることが明らかになった。

(2)「情報Ⅰの遠隔授業の展開の可能性」について



情報Ⅰの遠隔授業の様子

受信側の吾妻中央高校（写真左）

配信側の長野原高校（写真右）

情報Ⅰの遠隔授業を通し、遠隔授業に関する新たな課題が明らかになった。これまで取り組んできた受信生徒数が10名未満の遠隔授業と比べ、情報Ⅰは必修科目であることから、受信生徒数が30名以上となり、受信生徒数の多さが授業実施上の難しさをもたらすことになった。

特に大きな課題は、生徒の「見取り」に関する部分についてである。「見取り」については、画面を介した授業中のコミュニケーションや、ワークシートの取組状況の確認等、様々な工夫が行われ、少人数の遠隔授業では必要な見取りを行う事が可能であるとの認識が見られた⁹。しかし、30人以上の受信生徒数となる情報Ⅰの遠隔授業においては、授業への取組状況が必ずしも良いとは言えない生徒に対する指導について、その対応の難しさが明らかになった。例えば、対面授業の場合には、居眠りをしている生徒に対し「昨日よく眠れなかった?」、「体調は大丈夫?」など声かけすることなどで生徒の様子を把握し、適切なアプローチ方法を考えることが出来る。また、課題の提出等についても、「いつまでに提出できそう?」、「何かつまづいていることがある?」など、提出を促したり、状況を尋ねたりするなどすることが考えられる。一方で、大人数の遠隔授業においては、生徒の様子を把握できるのが、授業後のワークシートの確認や、受信担当者の情報交換時となるため、送受信担当の連携体制は十分であっても、授業中の声かけや目視での生徒状況の把握という面で、対面授業と比べてタイムラグが生じることになる。こうした、生徒の状況把握に関する小さなズレが繰り返されることで、特に丁寧な指導や支援が必要な生徒に対するフォローが不十分になる可能性がある。大人数での遠隔授業に取り組んだことで、対面授業における「見取り」の中には、生徒の学習評価等に直接結びつかない、生徒が発する機微な情報も含まれていることが改めて明らかになった。実際の授業では、学力や意欲などが異なる様々な生徒が1つの教室にすることが前提であり、特に遠隔授業は少人数の場合と、一定以上の人数の場合において、生徒の様子把握の困難さが大きく異なることが分かった。これまで群馬県では、受信側生徒が1名～9名の遠隔授業を行ってきたが、こうした授業と情報Ⅰでの状況を合わせて考えると、現状の遠隔授業システムの使用を前提とした場合、教室の2列目までに着席でき、カメラの画角に収まる6名程度までが、遠隔授業における適切な受信人数という

⁹ 群馬県のこれまでの検証結果及び、実証地域連絡会議等における他の管理機関からの報告等。

のが1つの結論であると言える。情報Ⅰは免許を保有する教員数も多くなく、遠隔授業のニーズが高いことを想定して検証に取り組んだが、情報Ⅰの授業はほとんどの学校において学級単位で行われることを考えると、展開については授業づくりの面及び技術的な面で解決すべき課題が多い。

(3)「配信センター化に関する検討」について

学校間配信による遠隔授業は、学校間の教育課程等の共通化が難しいこと¹⁰や、配信校に対する非常勤講師等の配置が必要¹¹になることなど多くの課題があることから、他県等でも取り組まれている配信センター方式の実施について検討を行った。

既に配信センター方式で遠隔授業を展開している他県等から伺った情報から、配信センターの設置・稼働には相当の予算確保や部署を横断した組織的な取組が必要なことが明らかであり、こうした点も念頭に置き、まずは教育委員会内で教員配置を担当する部署と情報共有を行い、配信センター化の可能性について検討を行うこととした。

他県等の配信センターは、通信制高校内に設置したり、教育センター内に設置したりする例が見られることに習い、県立の通信制高校に配信センターを設け、ニーズが想定できる「情報Ⅰ」の遠隔授業を配信することを想定の中心として協議をすすめた。

検討の中で、浮上した課題は次の3点である。

1点目は、情報の教員数が限られている事実はある一方、全ての県立高校において、情報の免許を保有した教員が情報Ⅰの指導に当たっている状況¹²であり、「情報Ⅰ」の遠隔授業の実施が喫緊の課題とは言えないということ¹³である。

2点目は、遠隔授業で実施する授業のニーズと教員配置を連動させることが難しいということである。年度末人事異動が内示されるのは3月中旬以降であることから、例えば現年度の教員配置を前提に、遠隔授業を受信する科目を検討しても、人事異動により、翌年度は遠隔授業を受信する必要がなくなったり、他の科目で受信の必要性が生じたりすることが考えられる¹⁴ということである。さらに、特に小規模校においては、選択者が1～2名などごく少数の授業もあるため、生徒の希望の変化や進路変更等により、授業そのものが開講されなくなるケースもある。仮に配信センターを設置した場合、配信センターに配置する教員、学校に配置する教員に加え、遠隔授業による開講講座を含めた総合的な管理・調整が必要になることが想定され、現状においては対応が難しい。

3点目は、配信センターからの配信とした場合でも、1つの授業を送信と受信2人の教員で実施する状況は変わらず、人員配置に関する効率化という点からはメリットが見いだしにくいということである。

¹⁰ 令和4年度実施報告書29ページ。

¹¹ 同30ページ。

¹² 令和5年度より実現。なお非常勤講師による授業も含む。

¹³ 2.5.(2)で前述したとおり、受講生徒数が多くなる「情報Ⅰ」を遠隔で実施すること自体への課題も合わせて考える必要がある。

¹⁴ 現年度は日本史の教員の配置がないため、翌年度の遠隔授業の受信を希望していたところ、人事異動で日本史の教員が配置されるなど。

こうした課題について、既に配信センターを展開している他県等においては、様々な調整が行われているものと考えられる。しかし他県等では、配信センターの設置・運営に関する管理や調整は、複数の部署を横断した組織をもって行われているケースが多く、現状の群馬県においては、遠隔授業の展開を見据えた体制整備を進めていくことが、必ずしも優先的な事項となっているとは言えない状況がある。今年度の検証により、配信センター化に関する様々な課題が一定程度明らかになったことは1つの成果と捉えられるが、組織的に課題に対応し、配信センター化を実現するには、遠隔授業の実施に新たな価値を見いだすなど、従来とは異なる視点からの検討が必要になると考えられる。

(4)「コンパクトなシステム構成による遠隔授業の実施」について

令和4年度までの取組において、遠隔授業の専用システムの利用は、授業づくりや機器に関するアフターフォロー等のメリットが大きい一方、継続的なランニングコストの確保という点で課題があることが明らかになった。他県等ではGoogle ミート等のオンライン会議システムに汎用的な機器¹⁵を組み合わせたシステム(以下、コンパクトなシステム)を用い、ランニングコストを抑えた取組を行っている事例が見られる。そのため、群馬県においても、コンパクトなシステムによる遠隔授業の実施について、検証を行う事とした。

検証のためのコンパクトなシステムは、Google ミートと1人1台PCで全生徒に貸与されているクロームブックを中心に、コア事業で導入した75インチモニタ及びカメラを組み合わせて構成した。検証は、渋川高校から尾瀬高校に理数物理の授業を配信することを想定し、実際の授業を模した形式で行った。

現在遠隔で行っている授業は、専用システムの使用を前提として組み立てており、モニター上に提示したスライドに、手書きで書き加えた内容が、受信側教室でも共有されるようになっている。コンパクトなシステムでは、手書した内容が共有できないため、理科や数学など、数式や図を用いる場面が多い教科の授業づくりに難しさが生じる可能性がある。なお、画面に手書きした内容の共有については、他のアプリ¹⁶を用い、専用システムと同様の授業づくりを行う事ができないか検証したが、画面共有に時間差が生じることが分かり、画面への書き込みを共有する手法としては使用しにくいことも分かった。そのため、コンパクトなシステムの使用により画面共有機能が使えなくなることを補うためには、教師の手元を映すための新たな書画カメラやデジタルスイッチャーを追加で導入したり、生徒が使用する端末の画面を共有する仕組みを別途準備したりする必要がある。

当初、専用システムからコンパクトなシステムへの移行は、比較的容易に行えると予想していた。しかし、適切な授業づくりのためには、新たな機器導入やアプリ使用が必要であることから、既存の機器等の構成のまま移行を行うことは難しいことが分かった。また、予算の観点からは、アプリの導入にかかる費用や、機器の保守や修理のための費用についても考慮していく必要があると言える。

¹⁵ 一般に市販される液晶画面やデジタルカメラ、スイッチャー等。

¹⁶ Google ジャムボード等。

2.5.1. 目標設定シートに対応した成果と課題

1. 本構想において、実現する成果目標の設定（アウトカム）

(1) 学びの基礎診断等により把握する生徒の学力の定着・向上の状況

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		－	10%以上向上	15%以上向上
実績値	－	実績値（基準）	測定できない	測定できない
把握のための測定方法及び指標	当初は、「成果検証用問題における正答率及び記述内容の推移や、ワークシートの記述や遠隔システムを通じた双方向の発表活動等のパフォーマンス評価の数値を検証し、生徒の学力の定着・向上の様子を見る。」ことを想定した。しかし、本事業においては、同一の条件で複数年に渡って開講される遠隔授業がないこと、授業の選択者が数名と少なく、年度毎に授業を選択する生徒の状況が大きく異なること等の理由から、数値を比較することで各年度における生徒の学力等の変化を適切に検証することができない。			

(2) 地域課題の解決等の探究的な学びに関する科目等の数（総合的な探究の時間を含む。）

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		15	16	17
実績値	11	15	16	17

（参考）上記のうち、学校設定科目の数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		5	5	5
実績値	5	5	5	5

R3：環境実践（尾）、環境測定（尾）、総合尾瀬（尾）、環境の保全（尾）、野外の活動（尾）、スポーツ探求（尾）、総合的な探究の時間（尾）、数学I（嬢）、日本史A・B（嬢）、地理B（嬢）、課題研究（嬢）、総合的な探究の時間（嬢）、商業実践（長）、総合的な探究の時間（長）

R4：R3に加えて 課題研究（尾）

R5：R4に加えて 理科セミナー（嬢）

(3) 免許外教科担任制度の活用件数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		0	0	0
実績値	0	0	0	0
構成校の数	5校			

(4) その他、管理機関が設定した成果目標

成果目標①：学校評価アンケートによる生徒の学校満足度

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		7割5分	8割	9割
実績値	約7割	7割2分	8割3分	8割8分
目標設定の考え方	主に長野原高校及び嬭恋高校について、学校評価アンケートによる生徒の学校満足度（「満足している」と肯定的に回答をした生徒の割合）の推移を見る。			

成果目標②：地元中学校から入学する生徒の割合

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		15%	20%	25%
実績値	12.7%	19%	14%	26%
目標設定の考え方	長野原高校及び嬭恋高校について、「両校への入学者／地元中学校※の卒業生」の推移を見る。 ※長野原町の中学校2校、嬭恋村の中学校1校。			

2. COREハイスクール・ネットワークとしての活動指標（アウトプット）

(1) COREネットワークの構成校における遠隔授業の実施科目数

	2年度	3年度	4年度	5年度
実績	0	2	3	5
見込み		2	3	3→5に変更

※令和3年度：物理基礎・探究

令和4年度：物理基礎・ビジネス基礎・探究

令和5年度：情報Ⅰ・理数物理・ビジネス基礎・ホームプランA・探究

(2) 地元自治体等の関係機関とコンソーシアムを構築している学校数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	2	3	4
見込み		2	3	3→4に変更

※令和3年度 長野原高校コンソーシアム及び嬭恋高校コンソーシアム

令和4年度 尾瀬高校コンソーシアム

令和5年度 吾妻中央高校コンソーシアム

(3) その他、管理機関が設定した活動指標

活動指標①：公開授業や成果発表会等の開催回数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	3	3	4
見込み		2	3	4
活動指標の考え方	県内外の関係者を対象とした公開授業を実施した。今年度は県外からの視察等に合わせて公開授業を設定するなどし、成果の普及に努めた。成果発表会は、1月末にネットワーク各校の関係者等を対象に実施した。			

活動指標②：探究的な学びや体験的な学び等の遠隔授業の実施（回数）

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	3	5	6
見込み		3	5	6
活動指標の考え方	尾瀬高校、吾妻中央高校の2校間においては、探究的な学びの遠隔授業の実施をきっかけに、尾瀬高校の生徒が吾妻中央高校を訪問し、互いの取組について理解を深める機会にも発展した。また、尾瀬高校においては、県外の学校等との遠隔授業・交流も行った。			

3. コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組

3.1. 調査計画

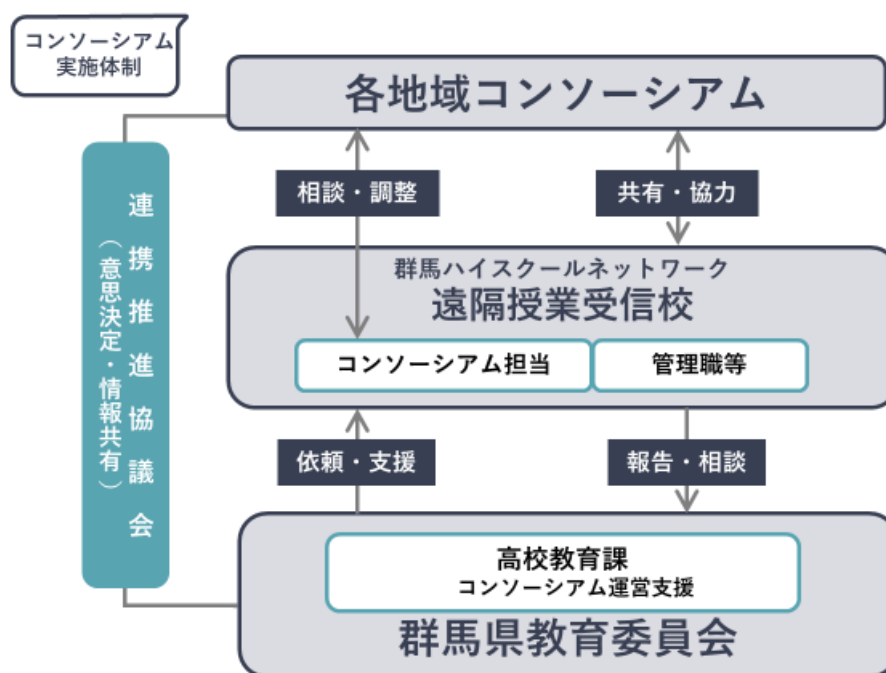
(1) コンソーシアムの取組に関する実地での調査（母体となる組織のないコンソーシアムの立ち上げ手法）

令和5年度は、複数学科（普通科、生物生産科、環境工学科、福祉科）を設置する吾妻中央高校のコンソーシアムの新規構築を行う。学科ごとに活発に取り組んでいる地域協働を、どのような手法で学科を越えた取組としていくのかについて、訪問調査や担当者へのヒアリングを通して得られた情報を元に明らかにしていく。

(2) 地元自治体との協議会開催による意見聴取（地元自治体との協力体制の強化）

地元市町村等と、より密接に連携・協力した地域協働の在り方を検討するため、小規模校である尾瀬高校、長野原高校、嬬恋高校が所在する自治体等において、学校の現状について情報共有を行うための協議会を実施する。協議会の実施により得られた情報等を整理することで、今後の地域協働の在り方について検討を進めていく。

3.2. 実施体制



3.3. 取組概要

令和5年度は、令和4年度までに構築した「長野原高校コンソーシアム」・「嬭恋高校コンソーシアム」・「尾瀬高校コンソーシアム」に加え、新たに「吾妻中央高校コンソーシアム」を構築し、4校で地域コンソーシアムの取組を推進した。

長野原高校コンソーシアムは「ぐんまコミュニティー・ハイスクール」事業の推進組織をベースに構築し、地域に密着した取組を進めてきた。

嬭恋高校コンソーシアムは、「連携型中高一貫教育」の推進組織をベースに構築し、中学校を中心とした協働体制に加え、地域の文化・商業施設等との連携を通し、取組の幅を広げてきた。特に、令和3年度から実施されている「地域・全国から選ばれる学校づくり」事業では地元自治体と学校の関係者が、学校の在り方や今後について具体的な議論を行う機会が多くあった。

尾瀬高校コンソーシアムは、学校の活動を応援・サポートすることを目的に、かつてより組織されていた「尾瀬高校活性化委員会」をベースに、実働的な組織として令和4年度に構築した。地域協働の取組を教育課程に落とし込むための優れた実施体制を有し、学校のカリキュラムにコンソーシアムが深く関わりながら多くの取組を進めることができた。

吾妻中央高校については、学科を越えた地域協働の在り方について検証を行うため、各学科による既存の取組を緩やかに結びつける形で新たにコンソーシアムを構築した。

本年度は、コンソーシアムに関する調査研究テーマを「母体となる組織のないコンソーシアムの立ち上げ手法」及び「地元自治体との協力体制の強化」の2点とし、管理機関の担当がそれぞれのコンソーシアムの活動を訪問するなどし、検証に必要な取組を進めた。

3.3.1. 地域と協働した取組実績

実施日程 ※巻末に【資料】としてまとめて掲載した

3.4. 取組内容

(1) コンソーシアムの取組に関する実地での調査（母体となる組織のないコンソーシアムの立ち上げ手法）



吾妻中央高校
中之条町と連携した取組の様子
（写真左右）

令和4年度までに構築した3つのコンソーシアム（長野原高校コンソーシアム、婦恋高校コンソーシアム、尾瀬高校コンソーシアム）では、ベースとなる組織での活動を整理し発展させる形で取組を行ってきた。

令和5年度にコンソーシアムを構築した、吾妻中央高校¹⁷は、平成30年度に中之条高校（普通科・生物生産科・環境工学科、共学校）と吾妻高校（普通科・福祉科、女子校）の統合により開校した学校である。統合前から、両校とも地域に根ざした高校として地域協働に取り組んできた経緯があり、統合後の吾妻中央高校においても、3つの専門学科を中心に、地域と協働した取組を教育課程内外で積極的に進めてきた。

一方、それぞれの学科における地域協働の取組が、学科の中だけで完結している状況も見られ、教育効果の高い取組であっても、成果が学校全体に波及しにくいといった課題があった。そこで、コンソーシアムの構築を通し、各学科の取組を整理・共有することで、地域協働の活動に学科を越えて取り組んでいくことができる体制づくりを目指すこととした。

令和5年度においては、その手始めとして、地域で行われる芸術祭である「中之条ビエンナーレ」の運営に以前から関わってきた環境工学科の取組に、普通科の生徒も参加できるよう、校内における調整を行った。具体的には、中之条町の地域おこし協力隊等の方と連携し環境工学科が取り組んできた行灯^{あんどん}作りに、普通科の生徒が参加できるようにするため、希望生徒の公欠を認める等、校内の運用方法の整理を行った。

学科を越えた取組として初めての試みだったが、当日は普通科から複数名の生徒が行灯作りに参加し、環境工学科の生徒と一緒に活動に取り組んだ。これまで環境工学科の生徒のみが取り組んできた活動に、普通科の生徒が参加できるよう調整し、実際に両科の生徒が共に活動ができたことは大きな一歩であった。

学科を越えた取組について、事業担当教員へのヒアリングからは、「普通科と環境工学科では、教育課程が異なっており、普通科の生徒が本来出席するはずの授業を公欠扱いとして

¹⁷ 1学年5学級、普通科・生物生産科・環境工学科・福祉科、共学校

環境工学科の授業に参加していること」、「学習内容や習得している技術の違いなどから、必ずしも同様の活動が行えるとは限らないこと」、「職員個人のつながりに依存する連携もあり、コンソーシアムによる組織的な対応が必要であること」などの課題があることが分かった。

（２）地元自治体との協議会開催による意見聴取（地元自治体との協力体制の強化）

コンソーシアムを構成している小規模校（尾瀬高校、長野原高校、嬭恋高校）は、コンソーシアムの構築以前から、地域と連携した教育活動を積極的に進めてきた。地域と連携した取組の中には、学校と地域がWIN-WINの関係となっているものや、授業の一環として教育課程内に取り入れられているものもある。一方で、少子化の影響から、近年は学校規模が急速に小さくなってきていること等、学校の状況には様々な変化が見られる。各校の入学者数に着目すると、長野原高校と嬭恋高校の減少が顕著で、両校の入学者数を5年前と比較すると長野原高校はマイナス34名（R5年度21名、H30年度55名）、嬭恋高校はマイナス25名（R5年度14名、H30年度39名）となっている。また、この2校ほど急減してはいないものの、尾瀬高校も減少傾向（R5年度41名、H30年度56名）となっている。令和4年度に各校のコンソーシアムの担当者に行ったヒアリングでは、「生徒が多かった頃の学校のイメージを持ったままと思われる地域からの提案等もあり、学校の実態とのギャップがある」¹⁸などの声が聞かれた。地域協働活動で地域と交流する機会があっても、学校の置かれた状況が地域に理解されているとは限らないことが明らかになった。このような状況を受け、学校と地域それぞれが双方の状況や考え方を適切に共有・理解することが、効果的なコンソーシアムの活動や、学校の将来を見据えた取組を考える上では必要不可欠であると考え、学校の現状共有を目的とした協議会を開催することとした。

協議会は、尾瀬高校は学校所在地である沼田市及び地域連携における関係性が深い片品村、長野原高校は学校所在地である長野原町及びぐんまコミュニティー・ハイスクールの取組で関わりのある草津町、嬭恋高校は学校所在地である嬭恋村の関係者¹⁹と学校関係者、県教育委員会関係者により、それぞれの地域で開催した。最初に教育委員会事務局及び学校から、近年の入学者の動向や学校の様子、他県等における地域連携の取組事例等について説明・紹介した後、出席者から御意見を頂戴する形とした。意見交換では、いずれの地域においても、「思った以上に生徒数が減っている」、「地元からの進学者が少なくなっている」など学校規模や入学者の動向に関するものの他、「地域連携の取組が地元の活性化につながっている」、「高校の存在が小中学校の教育にも良い影響を与えている」など声も上げられた。同時に、少子化が進むことに対する見通しの厳しさや、学校の存続に対する懸念に関する意見も出された。

¹⁸ 令和4年度実施報告書 48 ページ。

¹⁹ 首長、議会議長、教育長等。

3.5. 考察

3.4.の「(1) コンソーシアムの取組に関する実地での調査」及び「(2) 地元自治体との協議会開催による意見聴取」の整理結果について、「母体となる組織のないコンソーシアムの立ち上げ手法」と「地元自治体との協力体制の強化」の2つの視点から考えていく。

「母体となる組織のないコンソーシアムの立ち上げ」については、令和5年度に構築した吾妻中央高校のコンソーシアムの取組を通して検証した。吾妻中央高校の地域連携に関する課題は、普通科・生物生産科・環境工学科・福祉科の4つの学科において、それぞれ行っている地域協働の取組をどのように整理・共有し相乗効果を生み出していくかということであった。吾妻中央高校に限らず、複数学科を抱える高校の関係者からは、「学科毎に文化が異なり、別の学校のように」といった声も聞かれることがある。コンソーシアムの構築により、各学科で行ってきた地域協働の取組を整理し、一元的に管理するような手法も考えられるが、「別の学校のように」と形容される各学科の取組に急激な変化を与えることによる様々な懸念もあることから、まずは連携しやすい部分から着手するという手法をとった。このような状況の中、3.4.「取組内容」で述べたように、環境工学科の取組に普通科の生徒が参加する試みを実施できたことは、コンソーシアムを構築した成果として捉えることができる。一方で、学科を越えた地域協働の取組を進めていく上では、教育課程が異なる事による時間的な調整の難しさや、生徒が学んでいる内容の違いにより取り組める活動に差が生じることなどの課題も明らかになった。今年度の取組をきっかけに、どういった学科間の連携が、生徒や地域にとってよりよい形となるのか、引き続き検討を進めていく必要がある。

「地元自治体との協力体制の強化」については、尾瀬高校、長野原高校、嬭恋高校の3つのコンソーシアムにおいて開催した、学校の現状を共有する協議会を通して検証を行った。

昨年度の取組から、「学校の状況を地域と適切に共有すること」に関する課題が明らかとなり、入学者数や生徒数の見込み等、具体的な情報共有の機会として協議会を設定した。協議会を通し、小規模校の生徒数が急減している状況や、小規模校ならではの手厚い教育を行っていることなどを地域の方に理解いただき、今後の地域連携の在り方等について共有することができた点において成果があったと言える。

今回開催した協議会では、他県等において県立高校の魅力化推進のために、地元市町村が財政的・人的な支援を行っている例についても合わせて紹介し、意見を頂戴した。全国的な動向からは、小規模校の在り方について、都道府県と市町村の垣根を越えた連携に取り組むことが、今後の方向性の1つであると捉えることができる。一方、特に予算や人事に影響する部分での連携については、慎重な協議や判断が必要であることも、協議会を通して明らかになった。小規模校の将来像と地元地域の県立高校に対する要望や意向を丁寧にすり合わせながら、どのような連携・協力の形を探っていくのかについて、引き続き検討を進めていく必要がある。

3.5.1. 目標設定シートに対応した成果と課題

2.5.1 にまとめて記載した。

4. まとめ

令和3年度から開始したコア事業であるが、様々な状況への対応や、遠隔授業の新たな可能性の模索などを行う中で、試行錯誤を重ね、令和5年度は、5校のネットワーク校間で、4教科、週11時間の配信を実施してきた。当初は地区の中核的な中規模高である渋川高校（1学年5学級、全校生徒580名程度）を配信拠点として計画を進めてきたが、教員の持ち時間数や教員1人当たりの生徒数等も含め、渋川高校の実情を考慮する中、配信には非常勤講師の配置のための予算確保が必要になることや、渋川高校のみ55分授業であり、配信に関する時間的な効率が悪いこと等が明らかとなった。こうした点から、中規模高のリソースを小規模校へ向けた遠隔授業のために活用するという構想は、現実的に難しく、配信拠点を小規模校である長野原高校とする形としてきた。

今年度は、コア事業の遠隔授業実施のねらいを、当初の、「中山間地の小規模校の教育環境充実」に加え、「情報Ⅰの遠隔授業の展開可能性」に関する研究とし取組を進めてきた。

遠隔授業の実施に関する大きな成果は、遠隔授業の取組をゼロからスタートし、実施2年目の終盤（令和4年度後半）には、遠隔授業を進められるという手応えを得られた事である。付随して、教育課程の共通化などを通し、本来設置されていなかった科目を開講したり、より専門性の高い授業を配信したりするなど、小規模校の教育環境の充実に寄与することができた点も具体的な成果と考えている。

一方、「大学入試を見据えた専門性の高い授業の配信」に関して、受信側生徒のニーズという点で想定とは異なる部分もあった。コアハイスクールのネットワークに関わっている小規模校においては、共通テスト等を用いた大学進学へのニーズが限定的であることも明らかになり、遠隔授業を実施する前提を見直す必要も生じた。

また、本年度は、新たな遠隔授業の可能性を見いだすため、情報の教員不足等の状況も踏まえ、情報Ⅰの遠隔授業に取り組んだ。取組を進める中で、情報Ⅰが必修科目であるため、受信側生徒の人数が30人以上となるなど、大人数の生徒に対する遠隔での指導の難しさが新たな課題として浮き彫りとなった。具体的なものとして、30人を超える生徒と配信担当者との関係性の構築の難しさ等から、特に、授業への取組が良いとは言えない生徒に対する指導についての課題が明らかになった。遠隔授業については、これまでも「生徒の見取り」の方法について議論が進められてきたところであるが、「見取り」とは、テストの点数や提出物などの状況だけではなく、数値で表すことのできない機微な部分も含め教員が感じ取っていることを含んだものであり、対面授業においては、広い意味で生徒を見取りながら、指導を行っていることが改めて認識された。遠隔授業において、授業者が生徒の状況を適切に把握し、「指導と評価の一体化」を実現するには、画面の中で生徒が2列目までに座れる受信人数6名程度までが限度であると考えられる。

群馬県が使用する遠隔授業の専用システムについては、専用システムの画面共有機能を活用することで、より対面授業に近い形式で遠隔授業を実施することができることが明らかになった。また、受信側に同一教科の教員を配置したり、配信と受信側それぞれの担当が協力して授業づくりをしたりすることで、遠隔授業における対話的な授業づくりや、適切な評価を行うことができた。こうした工夫により、遠隔授業の受講生徒を対象としたアンケートでは、93.1%の生徒が遠隔授業に満足していると回答した。

コンソーシアムの構築・運用に関しては、コア事業が、各校の地域協働の取組を一層推進するきっかけとなり、学校にとって大きな成果があったと考えている。

特に、これまで各校が独自に取り組んでいた地域との活動について、整理したり分析したりすることで、地域と学校がWIN-WINの関係となるための関係づくりの手法や、地域との取組を円滑に教育課程に取り入れる手法などが明らかになった。

また、遠隔授業機器を用いて、物理的に離れた場所にあるコンソーシアムの生徒同士が、授業時間や放課後の時間等に交流する機会を得られたことは、今後の地域連携の取組の可能性を広げるものであった。

コンソーシアムの活動の中でも、尾瀬高校と吾妻中央高校の取組は、地域にとって両校が無くてはならない存在となっている例として見るができる。両校の特徴は、地域協働の取組を学科の専門性に基つき継続的に実施する中で、取組内容が精選・高度化され、地域の諸活動の中に学校の取組が組み込まれていることと言える。また、学校と地域のWIN-WINの関係構築のためには、地域から持ちかけられた活動に、部活や小単位の課題研究等で取り組み、その有効性や課題を整理する、緩衝の機能を持たせることが重要であることも明らかになった。

コンソーシアムを構築する小規模校3校においては、地域と協働した学校づくりについて新たな可能性を見いだすための取組を進めてきた。嬭恋高校では、地域・教育魅力化プラットフォームに伴走支援をいただきながら、地域の方々の声も取り入れながらのプログラム作成や、地域と学校をつなぐコーディネーター配置を検討するなどの取組を進めている。

他に、尾瀬高校・長野原高校・嬭恋高校の3校においては、学校の取組や現状等について、改めて地域の関係者と共有することを目的に、地元の首長や教育長等を招いた協議会を開催した。こうした取組が、これまでの学校と地域の連携・協力の在り方を越えた、新たな地域協働の形を見いだすきっかけとすることができるよう、引き続き検討を進める必要がある。

5. 次年度に向けた計画概要

コア事業で取組を進めてきた遠隔授業については、機器の運用や体制整備、授業づくりや評価の方法等、遠隔授業を恒常的に実施していくための知見を得ることができた点は大きな成果である。一方、学校間配信は配信校の負担が大きく理解が得にくいこと、人員配置や機器に関する予算確保及び、配信に応じた適切な人員配置の難しさがあることなど、想定以上の課題も明らかになった。

加えて、現在の群馬県のネットワークにおける学校間配信の枠組みは、配信校と受信校で同じ地域の生徒を取り合うような関係を生み出してしまうといった課題もある。遠隔授業の展開には、「効率化やコストの削減」のために遠隔授業を実施するという視点から、遠隔授業による「新たな価値の創出」という理解の共有が必要であると考えられる。こうした状況を鑑み、遠隔授業については、課題の整理や理解の醸成という点から、今年度末をもって一旦区切りをつけ、現在群馬県において進めている「第2期高校教育改革推進計画」に関わる取組の中で、その取扱いも含め、在り方について検討を進めていきたい。

コンソーシアムについては、各校においてそれぞれ取り組んでいた地域協働の取組を整理、共有することが、地域と学校のWIN-WINの関係構築やプログラムの充実などにつながるなど、大きな成果があった。一方、少子化・過疎化の中で中山間地の高校の生徒数や教員数が減少し、学校の置かれた現状が急速に変化してきていることを、地域の方により適切に理解いただき、小規模校の在り方について具体的な検討を進めていく必要があるなど、今後を見据えた課題もある。

来年度以降は、学校や地域の実情に応じ、構築したコンソーシアムの活動の一層の充実・発展を図ると共に、地域協働のこの先の在り方について、地域の関係者ともしっかりと連携しながら、引き続き検討を進めていく必要があると考えている。

最後に、本事業に関わっていただいた、全ての関係者の皆様に感謝申し上げ、ぐんまハイスクール・ネットワーク構想（コアハイスクール・ネットワーク構想）事業最終年度の報告としたい。

【資料】地域と協働した取り組み実績

尾瀬高校コンソーシアム		
月	実施内容	
4月	6日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	9日	沼田市内でのイベント参加（吹奏楽部による地域活動）
	10日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	14日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	15日	ネイチャークラブの実施（地域の自然体験をテーマにした一般公開事業）
	19日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	19日	クラブユースフォーラム参加（理科部による地域活動）
	20日	開校記念式典記念講演会の実施（卒業生で地元地域の醸造会社による基調講演）
	21日	自然環境調査をテーマにした校外実習（吹割の滝。自然環境科2年）
	21日	地域関係者へのインタビュー（J A利根沼田。普通科経営情報コース3年）
	21日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	22日	自然観察会の実施（理科部による地域活動）
	24日	地域関係者へのインタビュー（沼田市役所。普通科経営情報コース3年）
	24日	地域関係者へのインタビュー（道の駅尾瀬かたしな。普通科経営情報コース3年）
	24日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	25日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	26日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	28日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	29日	桐生市内でのイベント参加（アースデイ in 桐生。理科部による地域活動）
	29日	玉原高原での小屋開き（利根沼田自然を愛する会。理科部による地域活動）
29日	沼田市内でのイベント参加（わらべフェスタ。吹奏楽部による地域活動）	
5月	1日	地域関係者へのインタビュー（グリーンパークふきわれ。普通科経営情報コース3年）
	1日	地域関係者へのインタビュー（沼田社協利根支所。普通科経営情報コース3年）
	2日	自然観察をテーマにした校外実習（吹割の滝。自然環境科1・3年合同）
	6日	前橋市内でのイベント参加（県生涯学習センター。理科部による地域活動）
	9日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	12日	尾瀬での環境保護活動（環境省や尾瀬林業事業所。理科部による地域活動）
	15日	地域関係者へのインタビュー（北毛茶屋。普通科経営情報コース3年）
	15日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	16日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	17日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	17日	尾瀬の水芭蕉プロジェクト（尾瀬林業事業所。自然環境科3年）
	19日	自然環境調査をテーマにした校外実習（武尊山「水源の森」。自然環境科2年）
	19日	地域関係者へのインタビュー（原田農園。普通科経営情報コース3年）
	19日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	19日	FM尾瀬での収録（コミュニティエフエム出演。生徒会）
15日	ネイチャークラブの実施（地域の自然体験をテーマにした一般公開事業）	

	21日	沼田市内でのイベント参加（連合ぐんまふれあいフェス。理科部による地域活動）
	22日	企業訪問（県内7事業所。進路指導部）
	24日	尾瀬の水芭蕉プロジェクト（尾瀬林業事業所。自然環境科3年による地域活動）
	25日	自然観察をテーマにした校外実習（武尊山「水源の森」。自然環境科1年）
	26日	自然環境調査の実施（武尊山「水源の森」。理科部）
	27日	自然環境調査の実施（玉原高原。理科部）
	28日	玉原高原での環境保護活動（利根沼田自然を愛する会。理科部による地域活動）
	29日	自然環境調査の実施（武尊山田代湿原。理科部）
	30日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務）
6月	2日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務）
	2日	地域関係者へのインタビュー（ささの湯。普通科経営情報コース3年）
	2日	横浜市立さつきが丘小学校来校、尾瀬学習支援（校内。自然環境科3年）
	3日	新宿区内でのイベント参加（沼田市観光交流課、エコギャラリー新宿。理科部による地域活動）
	6日	自然観察をテーマにした校外実習（自然環境科3年と普通科1年による合同尾瀬探勝会）
	7日	自然観察をテーマにした授業（自然環境科3年。理数地学）
	7日	ゴルフ実習（地域のゴルフ練習場。3年選択履修「スポーツ探求」）
	9日	地域関係者へのインタビュー（HOTAKANE BASE。普通科経営情報コース3年）
	11日	自然観察会参加（利根沼田自然を愛する会。理科部による地域活動）
	11日	尾瀬の水芭蕉プロジェクト（尾瀬林業事業所。自然環境科3年による地域活動）
	14日	ゴルフ実習（地域のゴルフ練習場。3年選択履修「スポーツ探求」）
	15日	自然観察をテーマにした校外実習（奥利根自然センター。自然環境科1年）
	15日	ゴルフ実習（地域のゴルフ練習場。3年選択履修「スポーツ探求」）
	16日	利根中学校2年生来校（連携中学校による「高校調べ」の実施）
	17日	ネイチャークラブの実施（地域の自然体験をテーマにした一般公開事業）
	17日	自然環境調査の実施（武尊山田代湿原。理科部）
	18日	玉原高原での環境保護活動（利根沼田自然を愛する会。理科部による地域活動）
	18日	伝統農産物に関する体験活動（地域の農家。理科部）
	19日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務）
	20日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務）
	21日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務）
	21日	FM尾瀬での収録（コミュニティエフエム出演。生徒会）
	22日	ゴルフ実習（地域のゴルフ練習場。3年選択履修「スポーツ探求」）
	22日	シラネアオイ（高山植物）の保護活動（シラネアオイを守る会。自然環境科2年）
	23日	シラネアオイ（高山植物）の保護活動（シラネアオイを守る会。自然環境科2年）
	25日	沼田市内でのイベント参加（環境フォーラムぬまた。理科部による地域活動）
	28日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務）
	29日	連携中学校訪問（中学校の授業見学、意見交換）
	30日	連携中学校への応援団派遣（片品中学校。生徒会）
7月	2日	片品村内でのイベント参加（ふれあいバザール。理科部による地域活動）
	2日	自然環境調査の実施（玉原高原。理科部）
	3日	自然環境調査の実施（武尊山「水源の森」。理科部）

	4日	小水力発電所に関する講義(東京発電株式会社。自然環境科3年)
	4日	生徒会役員選挙に用いる投票箱借用(片品村選挙管理委員会。生徒会)
	6日	自然環境調査をテーマにした校外実習(山の鼻ビジターセンター。自然環境科2年)
	7日	自然環境調査をテーマにした校外実習(奥利根自然センター。自然環境科2年)
	9日	自然観察会参加(利根沼田自然を愛する会。理科部による地域活動)
	11日	小水力発電所の見学(東京発電株式会社。自然環境科3年)
	13日	自然観察会をテーマにした校外実習(県立ぐんま昆虫の森。自然環境科1年)
	15日	ネイチャークラブの実施(地域の自然体験をテーマにした一般公開事業)
	16日	ユース・フォーラム参加(国際ソロプチミスト。理科部)
	16日	自然環境調査の実施(尾瀬国立公園。理科部)
	17日	桐朋学園中学2年生への尾瀬学習支援(本校で実施。理科部)
	19日	ホスト訪問(尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)
	20日	片品村未来構想委員会参加(片品村役場。2学年団)
	22日	植樹イベント参加(新宿の森。理科部による地域活動)
	24日	ホスト訪問(尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)
	24日	自然環境調査の実施(武尊山「水源の森」。理科部)
	25日	自然環境調査の実施(石墨棚田。理科部による地域活動)
	25日	ホスト訪問(尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)
	25日	ぬまたネイチャースクール対応(沼田市教育委員会。理科部による地域活動)
	26日	ぬまたネイチャースクール対応(沼田市教育委員会。理科部による地域活動)
	26日	自然環境調査の実施(武尊山「水源の森」。理科部)
	27日	自然環境調査の実施(玉原高原。理科部)
	30日	夏季公開講座の実施(一般公開事業。理科部を中心に実施)
	30日	片品村内でのイベント参加(道の駅5周年イベント。理科部による地域活動)
	31日	自然観察会をテーマにした学校行事(尾瀬ハートフルホーム・システム。自然環境科)
8月	3日	地域関係者へのインタビュー(幡谷住民センター。普通科経営情報コース3年)
	19日	尾瀬フェスティバル運営(片品中学校)
	23日	木育円卓会議出席(沼田市農林課)
	23日	ホスト訪問(尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)
	25日	自然環境調査の実施(日光国立公園菅沼。理科部)
	26日	片品村内でのイベント参加(尾瀬の日フェア。理科部による地域活動)
	29日	熱血!高校生販売甲子園サポーター来校(主に高崎経済大学の大学生。商業研究部。)
	29日	野外活動・自然観察会をテーマにした校外実習(武尊牧場キャンプ場。自然環境科3年)
	30日	野外活動・自然観察会をテーマにした校外実習(武尊牧場キャンプ場。自然環境科3年)
	31日	自然環境調査の実施(武尊山「水源の森」。理科部)
9月	1日	地域関係者へのインタビュー(グリーンハウスイノウエ。普通科経営情報コース3年)
	1日	自然環境調査の実施(玉原高原。理科部)
	2日	尾瀬高フェアの実施(テラスぬまた。理科部、商業研究部、吹奏楽部、野球部ほか有志生徒)
	3日	自然環境調査の実施(武尊山田代湿原。理科部)
	4日	ホスト訪問(尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)
	5日	ホスト訪問(尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)
	5日	熱血!高校生販売甲子園サポーター来校(主に高崎経済大学の大学生。商業研究部。)

	学生。商業研究部。)
6日	ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務)
8日	自然環境調査をテーマにした校外実習 (奥利根自然センター。尾瀬国立公園。自然環境科2年)
9日	自然環境調査の実施 (玉原高原。理科部)
10日	自然環境調査の実施 (玉原高原。理科部)
11日	地域関係者へのインタビュー (片品村社協。普通科経営情報コース3年)
12日	熱血! 高校生販売甲子園サポーター来校 (主に高崎経済大学の大学生。商業研究部。)
12日	ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務)
14日	自然観察会をテーマにした校外実習 (奥利根自然センター。尾瀬国立公園。自然環境科2年)
15日	地域関係者へのインタビュー (ささの湯。普通科経営情報コース3年)
15日	地域関係者へのインタビュー (グリーンハウスイノウエ。普通科経営情報コース3年)
15日	地域関係者へのインタビュー (HOTAKANE BASE。普通科経営情報コース3年)
15日	FM尾瀬での収録 (コミュニティエフエム出演。生徒会)
17日	自然環境調査の実施 (日光国立公園菅沼。理科部)
18日	自然環境調査の実施 (武尊山「水源の森」。理科部)
19日	シラネアオイ (高山植物) の保護活動 (シラネアオイを守る会。日光国立公園。自然環境科3年)
20日	ゴルフ実習 (地域のゴルフ練習場。3年選択履修「スポーツ探求」)
20日	Sクラブ入会式 (国際ソロプチミスト利根ぬまた。理科部による地域活動)
21日	ゴルフ実習 (地域のゴルフ練習場。3年選択履修「スポーツ探求」)
21日	中高モルック大会の実施 (中高連携事業。尾瀬高1年、利根中3年、片品中3年合同)
23日	自然環境調査の実施 (武尊山「水源の森」。理科部)
25日	熱血! 高校生販売甲子園サポーター来校 (主に高崎経済大学の大学生。商業研究部。)
26日	自然観察会をテーマにした校外実習 (連携中学校と合同。武尊山「水源の森」。自然環境科3年)
27日	ゴルフ実習 (地域のゴルフ練習場。3年選択履修「スポーツ探求」)
27日	利根小学校5年生への尾瀬学習支援 (自然環境科3年生)
27日	職場体験 (1日目) の実施 (県内の27事業所。1学年全員)
28日	ゴルフ実習 (地域のゴルフ練習場。3年選択履修「スポーツ探求」)
28日	職場体験 (2日目) の実施 (県内の27事業所。1学年全員)
29日	職場体験 (3日目) の実施 (県内の27事業所。1学年全員)
10月	3日 尾瀬の環境保護をテーマにした校外実習 (環境省。尾瀬国立公園。自然環境科3年)
	3日 熱血! 高校生販売甲子園サポーター来校 (主に高崎経済大学の大学生。商業研究部。)
	4日 自然環境調査の実施 (武尊山「水源の森」。理科部)
	5日 自然環境調査の実施 (玉原高原。理科部)
	6日 自然環境調査をテーマにした校外実習 (奥利根自然センター。武尊山「水源の森」。自然環境科2年)
	7日 自然環境調査の実施 (武尊山「水源の森」。理科部)
	9日 片品村内でのイベント参加 (日帰り温泉施設。理科部、吹奏楽部による地域活動)
	13日 ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務)
	17日 尾瀬の水芭蕉プロジェクト (尾瀬林業事業所。自然環境科3年)
	17日 熱血! 高校生販売甲子園サポーター来校 (主に高崎経済大学の大学生。商業研究部。)
	19日 自然観察会をテーマにした校外実習 (奥利根自然センター。武尊山「水源の森」。自然環境科2年)
	20日 地域医療に関する意見交換 (利根中央病院や医療系学生サークル)

	<p>「ちいっこ」。理科部)</p> <p>20日 FM尾瀬での収録 (コミュニティエフエム出演。生徒会)</p> <p>23日 ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)</p> <p>24日 自然観察会をテーマにした校外実習 (グリーンパークふきわれ。自然環境科3年)</p> <p>24日 熱血!高校生販売甲子園サポーター来校 (主に高崎経済大学の大学生。商業研究部。)</p> <p>25日 ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)</p> <p>26日 シラネアオイ (高山植物) の保護活動 (シラネアオイを守る会。片品村内。自然環境科1年)</p> <p>27日 ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)</p> <p>28日 自然環境調査の実施 (尾瀬国立公園。理科部)</p> <p>29日 尾瀬の水芭蕉プロジェクト (尾瀬林業事業所。理科部)</p> <p>29日 地域関係者へのインタビュー (片品村役場。普通科経営情報コース3年)</p> <p>31日 自然観察会をテーマにした校外実習 (中高自然観察会。自然環境科3年)</p> <p>31日 熱血!高校生販売甲子園サポーター来校 (主に高崎経済大学の大学生。商業研究部。)</p>
11月	<p>3日 第14回尾瀬高祭 (地域関係者による出展企画、飲食物を中心とした物販)</p> <p>7日 自然観察会をテーマにした校外実習 (中高自然観察会。自然環境科3年)</p> <p>11日 石墨棚田のイルミネーション設置 (薄根地域ふるさと創生推進協議会)</p> <p>12日 玉原高原での環境保護活動 (利根沼田自然を愛する会。理科部による地域活動)</p> <p>14日 地域関係者へのインタビュー (道の駅尾瀬かたしな等。2学年)</p> <p>15日 自然観察会をテーマにした校外実習 (利根小学校4年生対象。自然環境科3年)</p> <p>16日 県有施設を活用した校外実習 (県立自然史博物館。自然環境科1年)</p> <p>17日 自然環境調査をテーマにした校外実習 (片品村鎌田地区。自然環境科2年)</p> <p>17日 FM尾瀬での収録 (コミュニティエフエム出演。生徒会)</p> <p>17日 熱血!高校生販売甲子園の準備活動 (地域関係者ととともに販売品加工。商業研究部。)</p> <p>18日 利根沼田クールチョイスコンテスト参加 (沼田市環境課。理科部)</p> <p>18日 熱血!高校生販売甲子園 (1日目) 参加 (高崎経済大学を中心とした実行委員会。商業研究部。)</p> <p>19日 熱血!高校生販売甲子園 (2日目) 参加 (高崎経済大学を中心とした実行委員会。商業研究部。)</p> <p>21日 ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)</p> <p>22日 ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)</p> <p>24日 自然環境調査をテーマにした校外実習 (吹割の滝。自然環境科2年)</p> <p>26日 石墨棚田に関する受賞祝賀会 (薄根地域ふるさと創生推進協議会。理科部)</p> <p>27日 地域探検の実施 (学校周辺地域6箇所を訪問。1学年の総合的な探究の時間)</p> <p>28日 第2回片品村未来構想委員会参加 (片品村役場。2学年)</p> <p>28日 ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)</p> <p>29日 ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)</p> <p>29日 連携中学校訪問 (利根中学校の授業見学、意見交換)</p> <p>29日 ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)</p>
12月	<p>1日 プロ野球選手との対談会 (テラス沼田。有志生徒)</p> <p>4日 新規ホスト希望者訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)</p> <p>4日 地域関係者へのインタビュー (地元の消防署。学校保健委員会)</p>

	6日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	7日	吾妻地域を訪問する校外実習1日目（県立ぐんま天文台、県立北毛青少年交流の家。自然環境科1年）
	8日	吾妻地域を訪問する校外実習2日目（県立吾妻中央高校、ハッ場ダム。自然環境科1年）
	9日	前橋市内でのイベント参加（ぐんま環境フェスティバル。理科部による地域活動）
	9日	沼田市内でのイベント準備（ごったくまつり。理科部による地域活動）
	10日	沼田市内でのイベント参加（ごったくまつり。理科部による地域活動）
	12日	自然観察会をテーマにした校外実習（前橋敷島公園。自然環境科3年）
	13日	理数物理校外学習（群馬大学）
	15日	FM尾瀬での収録（コミュニティエフエム出演。生徒会）
	18日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	18日	地域関係者へのインタビュー（片品小学校、片品中学校。普通科経営情報コース3年）
	19日	姉妹校交流事業（台湾岡山高級中學来校。群馬県地域外交課。全校対応。）
	19日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	20日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	20日	地域関係者へのインタビュー（片品保育所。普通科経営情報コース3年）
	23日	沼田市内でのイベント参加（テラス沼田。吹奏楽部による地域活動）
	25日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
1月	11日	片品村内での主催イベント実施に向けた準備（HOTAKANE BASE。普通科経営情報コース3年）
	12日	片品村内での主催イベント実施に向けた準備（HOTAKANE BASE。普通科経営情報コース3年）
	13日	片品村内でのイベント実施（HOTAKANE BASE。普通科経営情報コース3年）
	16日	地域探検の実施（学校周辺地域6箇所を訪問。1学年の総合的な探究の時間）
	18日	自然観察会をテーマにした校外実習（前橋敷島公園。自然環境科1年）
	19日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	19日	FM尾瀬での収録（コミュニティエフエム出演。生徒会）
	19日	地域関係者へのインタビュー（普通科経営情報コース3年）
	20日	研究成果報告（ぐんまの自然の「今」を伝える報告会。県立自然史博物館。理科部）
	22日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	23日	自然観察会をテーマにした校外実習（利根沼田自然を愛する会、奥利根自然センター。玉原高原。自然環境科3年）
	23日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
2月	2日	自然環境調査をテーマにした校外実習（奥利根自然センター。玉原高原。自然環境科2年）
	5日	横浜市立さつきが丘小学校6年生とのオンライングループ交流会（自然環境科3年）
	8日	自然観察会をテーマにした校外実習（奥利根自然センター。玉原高原。自然環境科1年）
	9日	第3回片品村未来構想委員会参加（片品村役場。2学年）
	13日	尾瀬ハートフルホーム・システムに関する相談（片品村役場）
	14日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	15日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）
	16日	尾瀬ぷらり館の展示物更新（尾瀬林業事業所。理科部による地域活動）
	19日	ホスト訪問（尾瀬ハートフルホーム・システム運營業務）

	26日	ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)
	27日	ホスト訪問 (尾瀬ハートフルホーム・システム運営業務)
3月	23日	学習成果報告会の開催 (道の駅尾瀬かたしな。学校主催行事。有志生徒が参加)

長野原高校コンソーシアム		
月	実施内容	
4月	25日	商業実践でのジオパークバーチャルツアー(講師:つなカン)
	26日	JR長野原草津口駅ソックマットの寄贈
	28日	交通安全教室(講師:長野原警察署)
5月	1日	浅間山北麓ジオパーク見学(講師:浅間山北麓ジオパーク)
	9日	読み聞かせ活動(中央こども館)
	10日	観光学習(商業実践)
	11日	花いっぱい運動事前準備
	12日	外部講師(あさまる)による読み聞かせ体験
	30日	ジオパーク学習(校内発表活動)
	31日	観光学習(商業実践)
6月	1日	読み聞かせ活動(北軽井沢地域)
	6日	読み聞かせ活動(長野原町社会福祉協議会)
	7日	読み聞かせ活動(中央こども園)、観光学習(商業実践)
	13日	インターンシップ(キックオフ講座)
	15日	読み聞かせ活動(長野原中央小学校)
	15-19日	花いっぱい運動(プランター配布)
	20日	第1回コンソーシアム会議
	27日	地域芸能(和讃)講座(音楽I)
7月	5日	群馬県立図書館出前授業
	6日	読み聞かせ活動(中央こども館)
	10日	建築ワークショップ(1学年総合的な探究の時間)
	12日	観光学習(商業実践)、読み聞かせ活動(中央こども園)
	13日	読み聞かせ活動(北軽井沢小学校)
	20日	AED講習会(講師:吾妻広域消防本部長野原分署)
	24,25日	ガス溶接技能講習(講師:(株)PCT 群馬教習所)
8月		
9月	5日	地域探究学習(2学年)
	7日	読み聞かせ活動(デイサービス)
	13日	観光学習(商業実践)
	14日	読み聞かせ活動(中央こども館)
	15日	地域探究学習(1学年)
	20日	読み聞かせ活動(中央こども園)
	22日	読み聞かせ活動(大桑小学校)
	26日	インターンシップ(マナー講座)
	27日	観光学習(商業実践)
	29日	学校説明(長野原中学校にて)
10月	6日	読み聞かせ活動(中央こども館)
	17日	インターンシップ(直前ワークショップ)

	18-20日 インターンシップ 25日 調理実習(フードデザイン)、渋川特別支援学校交流会、読み聞かせ活動(中央こども園) 27日 ハッ場ウォーク 29日 ジオパーク全国大会
11月	3日 長野原町文化祭(大型紙芝居) 7,10日 インターンシップ報告会 8日 観光学習(商業実践)、読み聞かせ活動(北軽こども館) 22日 調理実習(フードデザイン) 24日 社会人講話(講師:草津町ホテル一井代表取締役)
12月	5日 エイズデーキャンペーン 7日 読み聞かせ活動(中央こども園) 8日 社会人講話(講師:本校卒業生)、租税教室(講師:税理法人あがつま会計) 9日 浅間山北麓ジオパークフォーラム 13日 調理実習(フードデザイン) 14日 読み聞かせ活動(中央こども園)
1月	17日 外部講師(あさまる)による読み聞かせ体験 18日 草津町地域探究学習(スノーシュートレッキング) 23日 第2回コンソーシアム会議、読み聞かせ活動(中央こども館) 25日 読み聞かせ活動(中央こども園) 26日 交通安全教室(講師:長野原警察署)
2月	9日 年金教室(講師:渋川年金事務所)
3月	

孺恋高校コンソーシアム	
月	実施内容
4月	YouTubeチャンネル「つまチャン」、孺高HPの「孺高Blog」による情報発信 10日 孺恋浅間寮入寮式 17日 学校広報誌「孺高だより」の村内回覧・村内教育施設への配布 17日 数学 孺恋中学校と交流授業(～3月まで) 17日 歴史総合 2年 歴史学習(孺恋地域) 18日 日本史A 3年 歴史学習(孺恋地域) 24日 歴史総合 2年 歴史学習(孺恋地域) 25日 日本史A 3年 歴史学習(孺恋地域) 25日 コンソーシアム会議 28日 第1回PTA役員会・PTA総会 29日 JRC部 孺恋村安市協力ボランティア
5月	1～5日 スキー部・スケート部 湯の丸合宿(東洋大学・高崎健康福祉大学) 9日～ 図書館一般解放(毎週火曜日) 9日 交通安全教室(長野原警察) 20日 スケート部スケートリンク清掃 21日 JRC部 グランフォンド孺恋ボランティア 27日 JRC部 ポンペイ市交流展ボランティア 29日 孺恋村教育研究会総会 30日 2年 ビジネスマナー講座 30日 ネットトラブル防止教室(長野原警察)

6月	<p>5日 歴史総合 2年 歴史学習（長野原地域）</p> <p>6日 1学年地域学習（嬭恋村郷土資料館）</p> <p>6日 日本史A 3年 歴史学習（嬭恋地域）</p> <p>7日 1学年地域学習事後学習（嬭恋村郷土資料館）</p> <p>7日 JRC部 地域清掃</p> <p>8日 嬭中3年生 嬭恋高校訪問</p> <p>9日 群馬県高等学校PTA 連合会総会</p> <p>9日 群馬県立尾瀬高等学校 視察</p> <p>7～10日 スケート部 湯の丸合宿</p> <p>10日 JRC部 嬭恋クリーン大作戦ボランティア</p> <p>10日 スケート部 OB 総会</p> <p>12日 2年 短期インターンシップ事前学習</p> <p>12日 歴史総合 2年 歴史学習（嬭恋地域）</p> <p>13日 1学年地域学習ガイド交流会（嬭恋村郷土資料館）</p> <p>13～15日 2学年 短期インターンシップ</p> <p>17日 学校広報誌「嬭高だより」の村内回覧・村内教育施設への配布</p> <p>17日 スキー部・スケート部合同練習（湯ノ丸高原）</p> <p>19日 2年 短期インターンシップ事後学習</p> <p>20日 群馬県連携型中高一貫教育実践推進委員会</p> <p>21日 第1回学校評議員会</p> <p>22日 第1回防災訓練（嬭恋分署）</p> <p>28日 1学年地域学習まとめ（嬭恋村郷土資料館）</p> <p>28日 2年 短期インターンシップ報告会</p> <p>29日 第1回群馬県立嬭恋高等学校魅力化推進委員会</p>
7月	<p>1日 スケート部中高連携 合同練習会</p> <p>2日 JRC部 嬭恋高原キャベツマラソンスタッフボランティア</p> <p>5日 出張 tsukurun</p> <p>10日 嬭恋中学校 連携交流授業①（数学）</p> <p>11日 野球部応援（有志生徒）</p> <p>15日 スケート部練習（バラギ高原・湯の丸高原）</p> <p>17日 スケート部練習（バラギ高原・湯の丸高原）</p> <p>17日 学校広報誌「嬭高だより」の村内回覧・村内教育施設への配布</p> <p>18日 1学年地域学習発表会</p> <p>20日 非行防止教室（長野原警察）</p> <p>21日 JRC部・有志生徒による鹿沢清掃</p> <p>22日 スケート部練習（湯の丸高原）</p> <p>28～31日 スキー部・スケート部合同練習（湯ノ丸高原）</p> <p>29日 つまごい祭りパトロール（渉外部）</p>
8月	<p>3日 嬭恋スケートクラブ交流会</p> <p>8日 教育関係者ジオパーク研修会</p> <p>29日 1学年地域学習事前学習（草津の水質調査）</p>
9月	<p>5日 1学年地域学習（動画作成）</p> <p>9日 学校説明会</p> <p>12日 1学年地域学習事前学習（草津の水質実験）</p> <p>14日 理科セミナー 3年 小高連携授業に向けた授業準備</p> <p>15日 マナーアップ運動</p> <p>17日 学校広報誌「嬭高だより」の村内回覧・村内教育施設への配布</p> <p>19日 1学年地域学習（品木ダム見学）</p> <p>19日 日本史A 3年 草軽電鉄調査</p> <p>20日 長野県軽井沢高等学校 視察</p> <p>26日 1学年地域学習（発表会準備）</p> <p>29日 2年 日本ジオパーク全国大会 in 関東 プレ発表会</p> <p>27～30日 スケート部合宿（湯ノ丸高原）</p> <p>30日 JRC部 北軽井沢の杜クラフトフェアスタッフボランティア</p>

10月	<p>2日 日本史A 3年 草軽電鉄調査</p> <p>2～3日 幼高連携 読み聞かせ校内発表会</p> <p>3日 1学年地域学習(発表会準備)</p> <p>3日 日本史A 3年 稲刈り体験</p> <p>4日 開校記念式典</p> <p>4～5日 岩手県立大槌高校視察</p> <p>5日 開校記念コンサート(長野原高校と同時開催)</p> <p>6日 奥多野地域連携型中高一貫教育公開研究授業</p> <p>11日 幼高連携 読み聞かせボランティア(西部幼稚園)</p> <p>12日 1学年地域学習(発表会準備)</p> <p>17日 1学年地域学習(発表会準備)</p> <p>17日 日本史A 3年 草軽電鉄調査</p> <p>24日 1学年地域学習(動画作成)</p> <p>27日 1・2学年地域学習(高校生議会) 孺恋村議会事務局職員との打ち合わせ</p> <p>29日 2年 日本ジオパーク全国大会 in 関東 成果発表</p> <p>30日 第2回群馬県立孺恋高等学校魅力化推進委員会</p> <p>31日 孺高ウォーク(学校行事)</p>
11月	<p>6日 スケート部 OB会より支援金贈呈</p> <p>6日 1学年地域学習(発表会)</p> <p>6日 歴史総合 2年 歴史学習(草軽電鉄調査)</p> <p>7日 2学年進路ガイダンス</p> <p>8日 第2回防災訓練(孺恋分署)</p> <p>9日 理科セミナー 小高連携授業(出前授業)西部小学校</p> <p>9日 性・エイズ講演会</p> <p>10日 1・2学年地域学習(高校生議会) 孺恋村議会議長との打ち合わせ</p> <p>11日 歴史総合 2年 歴史学習(吾妻鉦山)</p> <p>14日 日本史A 3年 歴史学習(吾妻鉦山)</p> <p>14日 1・2学年地域学習(高校生議会)外部講師による導入学習</p> <p>14日 中高一貫教育に伴う県外視察訪問(静岡県立松崎高等学校)対応</p> <p>17日 1・2学年地域学習(高校生議会)1・2学年教諭による協議会</p> <p>17日 学校広報誌「孺高だより」の村内回覧・村内教育施設への配布</p> <p>20日 1・2学年地域学習(高校生議会)1・2学年教諭による協議会</p> <p>21日 1・2学年地域学習(高校生議会準備)</p> <p>22日 進路指導部 孺中にて「高校オリエンテーション」</p> <p>27日 1・2学年地域学習(高校生議会)1・2学年教諭による協議会</p> <p>28日 1・2学年地域学習(高校生議会準備)</p> <p>28日 エイズキャンペーン(保健委員・保健部教員)</p>
12月	<p>1日 1・2学年地域学習(高校生議会)1・2学年教諭による協議会</p> <p>6日 令和5年度 第1回 魅力化定例協議会</p> <p>7日 2年 スケート教室</p> <p>7日 1・2学年地域学習(高校生議会準備)</p> <p>7日 論理・表現Ⅱ 小高連携授業(出前授業)東部小学校</p> <p>8日 1・3年 スケート教室</p> <p>9日 2年 浅間山北麓ジオパークフォーラム2023 成果発表</p> <p>11日 1・2学年地域学習(高校生議会準備)</p> <p>12日 1・2学年地域学習(高校生議会準備)</p> <p>12日 1・2学年地域学習(高校生議会)1・2学年教諭による協議会</p> <p>12日 2年 職業講話</p> <p>12日 日本史A 3年 歴史学習(旧太子駅)</p> <p>14日 1・2学年地域学習(高校生議会準備)</p> <p>14日 1・2学年地域学習(代表生徒 通告書提出)</p>

	17日	学校広報誌「嬢高だより」の村内回覧・村内教育施設への配布
	18日	1・2学年地域学習（高校生議会）1・2学年教諭による協議会
	20日	1・2学年地域学習（高校生議会準備）
	21日	1・2学年地域学習（高校生議会）
	21日	小高連携 西部小学校スケート教室ボランティア
	23日	終業式にて薬物乱用防止教室（長野原警察）
1月	12日	学校保健委員会
	16日	1・2学年地域学習（高校生議会振り返り）
	19日	令和5年度 第2回 魅力化定例協議会
	19日	第3回群馬県立嬢恋高等学校魅力化推進委員会
	22日	嬢恋中学校 連携交流授業②（数学）
	23日	3年 社会人講話
	23日	1年 進路ガイダンス
	23日	第2回学校評議員会
	24日	村議会意見交換会
	31日	嬢恋村いじめ防止子ども会議
2月	6日	教育関係者ジオパーク研修会
	8日	安全衛生委員会
	16日	第2回PTA役員会
	17日	学校広報誌「嬢高だより」の村内回覧・村内教育施設への配布
	26日	嬢恋村教育研究会総会報告会
	29日	同窓会入会式
3月	2日	JRC部 冬の大会嬢恋DAN!DAN!DAN!スタッフボランティア
	17日	学校広報誌「嬢高だより」の村内回覧・村内教育施設への配布

吾妻中央高校コンソーシアム		
月	実施内容	〈普〉 普通科 〈生〉 生物生産科 〈環〉 環境工学科 〈福〉 福祉科 〈他〉 その他（部活動等）
通年	〈生〉 吾妻中央高校生産物を利用した商品開発（JA あがつま） 〈生〉 公共機関への草花プランター設置 〈生〉 自治体や各種団体依頼の草花苗生産 〈生〉 牛共進会参加と運営 〈生〉 無人トラクタ圃場耕耘およびラジコン草刈り操作実演見学 〈生〉 ふれあい動物園開催（地元の保育園、幼稚園） 〈他〉 部活動での合同練習・指導（中之条中学校） 〈他〉 バレー、ソフトテニス、陸上、バスケットボールにおける競技指導（地域の指導者）	
4月	30日 〈福〉 スポーツフェスティバル（東吾妻町教育委員会事務局） 下旬 〈生〉 野菜、草花苗の予約販売（地域住民）	
5月	6日 〈福〉 花植えボランティア（シェアハウスぬくもり） 26日 〈環〉 ハンディレーザ測量機講習会（株式会社リョーチ）	
6月	1日 〈福〉 買い物支援（株式会社ピュアネクスト） 15日 〈環〉 六合赤岩地区へ木製プランターを贈呈（中之条ふるさと灯りの会） 16日 〈環〉 センサー搭載ドローンによる植生生育状況観察（NDVI） 固定翼ドローンの講習と空撮（東京農業大学） 19日 〈環〉 四万温泉へ木製プランターを贈呈（中之条ふるさと灯りの会）	

	中旬	〈生〉 さわやか街道ネットワーク合同植栽（花の提供 8000 鉢）（中之条土木事務所）
7 月	12 日	〈普〉 大学生との交流会（HLAB）
	14 日	〈生〉 中之条町社協フードサポート事業協力（草刈り）（中之条みらい米プロジェクト、各所）
	26 日	〈福〉 発知溪流釣りセンター（吾妻養護老人ホーム）
	下旬	〈環〉 インターンシップ（建設業協会、測量設計業協会） 〈他〉 男女バレーボール部合同練習（中之条中学校）
8 月	3 日	〈福〉 夏祭り（吾妻養護老人ホーム）
	12 日	〈環〉 中之条町内へサギ草展示（中之条町ふるさと灯りの会）
	17～	〈福〉 杉並区・東吾妻町こども交流会（東吾妻町教育委員会事務局）
	20 日	〈普〉 総合探究、特産品を使用した商品開発のための調理実習（中之条コネクト、宇都宮大学サークル）
	中旬	〈生〉 短期インターンシップ（各所） 〈生〉 美野原農場職場体験受入れ（中之条中学校） 〈生〉 神奈川・東京よりインターン事業参加高校生受入れ（中之条町）
9 月	7 日	〈環〉 ベンチ・テーブルの贈呈（中之条ビエンナーレ事務局）
	8 日	〈福〉 入浴介助実習（中之条町社会福祉協議会）
	9 日	〈環〉 伊勢町睦会、西岳拓貴氏（アーティスト）と合同でビエンナーレに出展（中之条ビエンナーレ事務局）
	12 日	〈環〉 出前授業（東吾妻中学校）
	14 日	〈生〉 パンジーの播種（高山中学校）
	28 日	〈環〉 中之条町社協フードサポート事業協力（草刈り）（中之条町みらい米プロジェクト）
	30 日	〈福〉 名月祭ボランティア（医療法人富士たちばなクリニック 伊香保ケアセンター明月）
10 月	2 日	〈福〉 おはなしフェスティバル（中之条町立中央公民館）
	10 日	〈福〉 いきいき祭り（医療法人大誠会 内田病院）
	16 日	〈環〉 四方積善館へ行灯設置（中之条町ふるさと灯りの会）
	下旬	〈普〉 探究（外国人の暮らしやすい町づくりグループ）、日本語教室 みらい見学、交流（中之条町教育委員会）
	22 日	〈福〉 第 4 回みんなのバリアフリー運動会ボランティアスタッフ（特定非営利活動法人伊勢崎西部スポーツクラブ）
	23 日	〈生〉 パンジーの鉢上げをして中学校で栽培し、小学校に配付（高山中学校） 〈環〉 農業用水路の機能診断、簡易補修（農業整備課）
	25 日	〈普〉 探究（商品開発）、調理実習（地域おこし隊半田さん） 〈環〉 JA 群馬青年部大会参加（研究活動成果発表）（JA 群馬中央会） 〈環〉 現場見学会（建設業協会、群馬県建設企画課）
	30 日	
11 月	10 日	〈福〉 入浴介助実習（中之条社会福祉協議会）
	18 日	〈生〉 中之条町社協フードサポート事業協力（試食会）
	19 日	〈生〉 大根収穫祭（中之条町みらい米プロジェクト）

	19・ 20日 22日 27日	〈普〉 リンゴ収穫イベントスタッフ（中之条ガーデンズ） 〈普〉 探究（商品開発）、調理実習（地域おこし隊半田さん） 〈環〉 JA あがつま中之条支店に行灯設置（中之条ふるさと灯りの会）
1 2月	7日 8日 14日 18日	〈環〉 全国シンポジウム参加（研究活動成果発表）（全国土地改良事業団体連合会） 〈生〉 中学校への出前授業（高山中、長野原西中、草津中、東吾妻中、中之条中） 〈生〉 津久田小学校とプランター作りをして地域に配布（「未来花壇」渋川市都市計画課） 〈環〉 中之条町内の行灯に挿絵を制作し設置（中之条町ふるさと灯りの会） 〈環〉 現場見学会（藤岡北・勢多農と合同）（群馬県農村整備課）
1月	6日 15日 20日 22日 27日 28日	〈福〉 中之条町上毛カルタ大会審判（中之条町立中央公民館） 〈生〉 豚枝肉の解体と加工（全国食肉学校） 〈普〉 探究（外国人の暮らしやすい町づくりグループ） 日本文化デーの実施（中之条町空き家利用、町内ALT3名、外国籍の親を持つ小学生2名参加）（中之条町教育委員会、町おこし隊枝さん） 〈環〉 中之条町内の行灯に挿絵を製作し設置（中之条町ふるさと灯りの会） 〈福〉 スマホ教室（中之条町立中央公民館） 〈他〉 選抜チームとの練習試合（吾妻郡中体連バスケットボール専門部）
2月	9日 18日 24日	〈福〉 排泄介助（中之条町社会福祉協議会） 〈福〉 中之条カルタ大会審判（中之条町立中央公民館） 〈福〉 スマホ教室（中之条町立中央公民館）
3月	16日 中旬 下旬	〈福〉 ふれあい広場（アロマハンドトリートメント）（東吾妻町ボランティア事務局） 〈環〉 出前授業（高山中学校） 〈環〉 出前授業（長野原中学校）

文部科学省委託事業

地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業
(COREハイスクール・ネットワーク構想) 令和5年度実施報告書

群馬県教育委員会事務局

高校教育課・総務課

371-8570 群馬県前橋市大手町1-1-1